

昭和十一年

大正十一年十二月十五日發行

學友會報

第百六十三號

神戸高等商業學校學友會

○論説

思想界の現状を直視して……………生島廣治郎

○研究

貨幣の價值について……………林健二

自由貿易か自由生産か(一)……………松本幸治

○紀行と隨筆

南國印象記……………橋本政一

妄言錄……………齋兆兼

雜記(其二)……………大手潤

○短歌と俳句

冬日小情……………武井勇二

無題……………碧生

幼き心……………横尾綠

秋の風……………夢前生

俳筵……………葉櫻會

○學生文庫新書目

○部報

陸上運動部—蹴球部—劍道部—語學部—相撲部—柔道部—弓術部—野球部—講演部

○學校記事

○圖書館新着書目

○同窓會記事

ニース馬耳塞から神戸まで……………中川靜香

商大問題本部實行委員會

香港支部會報

紐育同窓會支部便り

和歌山縣同窓會支部便り

在神十二期生の會

會員動靜

會費受領報告



論説

思想界の現状を直視して

生島廣治郎

一、歐洲戦争終局以來、動搖に動搖を重ね、飽くなき新思想の追求に奔弄されてゐた我が思想界は、大正十一年の末に於て甫めてアインシュタインの相對性原理に逢着して、兎も角「萬事皆相對だ」といふ事が今更の様に氣が付いた。固より覺る事遅しと雖覺らざるに若かずである。而し我が思想界が加ふる相對性の結論に出でた事は、從來新思想を絕對に眞とし舊思想を絕對に誤と看做してゐた、所謂偽新思想家連に對してはよい皮肉である。況んや此の相對性論が現今世界に於ける最も新しい思想であるに於てをや。而しアインシュタインの相對性論は申す迄もなく理論物理學の問題である。石原博士の所謂物理の世界である。其の自、實在でな

い事は明かである。世間には往々此の問題をはき違へて、哲學上の重要問題であるかの如く考へてゐるが、それは大なる誤である。哲學には直接何等の關係なき事だけは心得て貰ひたい。思ふに現代は、一口に、思想界の混亂といはれて居る。而し、一體どう混亂してゐるかといふ事に就いては、唯外來思想の侵入の爲め新舊思想が混雜してゐると、いふ事以外に一步も出てゐない。そこで、新思想家連は、眞向から自由主義を振り翳して突撃するし、頑迷連は過激思想取締法案で喰ひ止めやうとする。其間に挟まれて生棲してゐる現代人こそよい迷惑、一體どうしてよいか、茫然自失し或は驚き或は歎き、所謂人心不安の状態に陥らざるを得ないのである。抑も漠然と思想の混亂といふ事は、其の自ら矛盾である。何故なら混亂せる様なものは思想でなく、それは幻想か夢想である。若し眞の意味での混亂がありとすれば、それは次の場合に限る。即ち藝術、宗教、自然科学、哲學等の概念相互混同である。例へば哲學的世界觀と藝術的世界觀とを混同し、自然科学的思考と哲學的思考とを混同する事である。彼數

年前の森戸事件は前者混同のよき標本であり、ア氏相對性論を哲學とする事は、後者混同のよい典型である。約言すれば範疇の混同といふ事になるのである。

二、

乍然かくの如き思想界の混同を惹起し今に至る迄尙ほ其の状態を續けてゐる事は由來如何なる事由に胚胎するのであらうか。忌憚なくいへば、世人の哲學的思想 Philosophieren の缺欠と云ふ事に歸するものたといふ事が出来る。夫れ現代生活上最も重要な問題は社會問題である。現代は工場労働者は勿論農民も、店員も、官吏も、軍人も、政治家も、宗教家も智識階級も口を開けば異口同音社會問題と唱へて居る。而して其の論ずる所を煎じ詰めて冷靜に考へ見ると結局感情の問題である。何等論理上の根據なきセンチメンタルである。或は弱者の味方とか或は弱者への同情とかいつて居るが、而も此の同情たるや、他人の懷を當てにした何等自己の腹の痛まない同情である、世に恐らく之れ程蟲のよい同情はない。否甚しきに至つては、かく叫ぶ事を營業とし莫大なる富を蓄積してゐるものさへあるに至ては、啞然たらざ

を得ないであらう。而し感情は依然として感情であつて、根なき水上の浮草の如きものである。嘗て、獨逸の新ヘーゲル派の哲學者故フリッフ、ペロルツハイマー Fritz Beroelzheim 此の社會狀態を目して「經濟生活のロマンチズム」と稱したが、蓋しひひ得て切なるを覺えるのである。而してかゝる經濟生活上の「ロマンチズム」をして現代社會に跳梁跋扈せしめ、而も世人は何等の怪しむ所なきは何故ぞ。是れ畢竟世人が經濟哲學や法律哲學に欠缺してゐる爲めである。殊に我が國の如きは殆んどかゝる方面は之迄皆無であつたといつても差支ない位である。偶々左右田喜一郎博士の警鐘によつて、多年の迷夢を打破られ、一部識者が最近漸くにして此の方面へ鋭き注意を注ぎかけた。而し現代本邦の社會には今尚ほ經濟哲學法律哲學の無用論を公々然と唱へてをる。而しかゝる言葉は要するに前世の遺物であるといふ以外に別段通用しない。之れを稱して現代の惡思想の一種だと諒されても致し方がない。かゝる惡思想が社會を風靡してゐる限りは社會問題は愚か世は絶えざる危險思想の恐怖によつて震へてをらねばなるまい

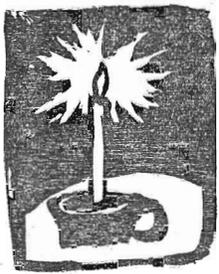
思へば實に夏尚ほ寒き感とするではないか。

三、

遮莫我が思想界は前途決して悲觀すべきでない。大いに樂觀し洋々たる前途を祝福すべきである。最近我が思想界を一瞥するに、哲學的、宗教的色彩が益々濃厚になりつゝある。少くとも現代の若人新人には「哲學的に考へざるものは人に非ず」と迄いはれて居る。嘗て牧野英一博士が大學の學生にいはれた事が面白い。「諸君は哲學々々といつて難かしい講義を聞き、書物を讀むが、解りやしないんだらう。」而し聞かぬば恥だからね」と、博士の言は單に一時の笑ひ話として馬耳東風に聞き流して置くべき話でない。此は少くとも現代青年の心理狀態を巧みに穿つたものとして、傾聴に値する。昔は世間では花は櫻木、人は武士といひ武士でなければ人間ではなかつた。然るに現代では人間とは何であるか。今更武士といつた所で封建時代や、軍國主義時代の遺物としか、現代青年には響かぬであらう。要するに人は、單に衣食住の追求に日も維れ足らずと稼いで直接經驗を離れない以上は單なる高等哺乳動物である、

自然の二物に過ぎないのである。人間などは、以ての外の事である。而し眞に人間の人間たる所以は、ヘーゲルがいつた如く本來自由に思惟する力にある。ゲーテは、フアウストに於て此の力を「ゆらぐ現象の内漂へるものを、持久する思惟の力で繋ぎ止める働」といつて居る。哲學的に考へる事は固より自然科學的思惟と異なる。後者は捕象概念を取扱ふが前者は最も具體的な純一無雜な必然性の把握である。此純一無雜な菩薩道の體現をフイテは彼の行の哲學に於て事實にあらずして事行なり Nicht thatsache, sondern Thatandlung と喝破して居る。

哲學的に考へる事はつまり概念を明かにする事である。クローチエは故に Unity, Unzindistinction を稱へて居る。要は事物の相對性の把握である。而し相對性の擧がになれば益々絕對性は發揮される相對的なれば益々絕對的となることを忘れてはならないのである。甚だ雜駁であつたが言ふべき事は澤山あるが之れで筆を止めて置く。(十二月七日三更)



研究

貨幣の價值について

在商大 林 健 二

「私には日の記憶はありません。しかし十月の始めの夜であつた。しかも月夜だつた。私が中野に訪れて行つた時、君は二三日以前に丸善で求めて來たのだといつて此の書物を出して見せた。そうして獨逸語をいつかりとやつて此を讀破するのだとも附加へましたね、私が先に讀ましてくれなにかと申出た時君は心よくそれを許してくださつた。借りて歸つた私は大急ぎで十二頁から三十六頁までを先月の十四日までかゝつて譯し尙さきに進むつもりでそのまゝ机の上に置いていたのです。處が突然その翌日君の入院が非常な驚きを私に與へました。それから二十日間、君も苦しかつたのでせう。私等も一生懸命でした。しかし運命はもうすでに定まつてゐたのです。十一月一日午後九時二十分。君の靈が遂に此の世を辭し去つた時に此の本は私の机の上に二十日前と變る所なくのつておりました。そうして今は永久に私の手に止まるやうになつてしまつたのです。」

或る空白の場所に私が書き入れたのは嘗ては眞島兄の手に持たれたメンテイクセンの著書「貨幣と資本」です。私は茲に見の形見として私の手に残つ

た此の書の一部の拙譯を憶んでその靈に捧げやうとするのであります。(大正二一、一、一六)

拙譯は Dr. Friedrich Bendixen 著 Geld und Kapital 3auf. 1922. に集められた論文の 1. Vom Geldwert (1) (1910) (S21-28) の譯である。

價值の明らかに物の性質でないことは丁度體積又は重量と同じである。價值は物の内にあるのではなく、人の表象の中に存するのである。一物の價值について判斷を下さんとする者はその物の性質に顧みて如何に高くそれが評價されるか又は如何なる價格を持ち得るか云ふことを述べる。物自體について云ふのではなくて、人間の目的に對してその達し得らるべき性質及び使用されべき性質について云ふのである。價值論に於て交換價值、使用價值、主觀價值、客觀價值を分つが今はそれに觸れる必要はない。たゞ物の價值は人間の思考作用の結果であることを認むれば足りる。

流通の總ての對象は其價值を持つといふ時それは評價をなす思考が如何なる物の前にも停止しない事を意味する。而して斯の如くに各物の價值は過程がなされつゝある間に物は相互に價值關係に入るのである。一物の價值が評量される時同時に一つの判斷が他の總ての流通財貨に對する價值關係に關して云はれる。如何なる價值もそれ自から一個獨立のものではなく各他の價值に對する關係を通して定められる。故に價值の世界は一つの價值關係の見渡しきれない網である。

多くの關係を相互に比較せんにこれを一つの計算單位に引直すことが必要である。異なる分母を持つ分數の多くを計算し得ることは誰も知つてゐる。いふのはそれ等を共通分母になし得るから。しかし一つの分數は二つの大きな分子と分母との關係に外ならない。共通分母の導入に依つて異なつた分母に對する

分子の關係を解いて以て分子を共通分母に對する新しい關係を持つて來るやうに、取引に於て相對立する價值は相互の關係によつて解かれて一つの共通分母に齎され、その共通分母は價值の限りなき多くの數を相互に比較し得せしめる。貨幣が正に此の役目をはたすものである。故に貨幣は總ての價值の共通分母である。

貨幣は抽象的價值單位である。吾人が一物の價值を計算せんとする時價值單位の數を以て呼ぶのである。評價された物の價值は共通分母即貨幣に對する分子である。

しかし貨幣自體の價值はどうか。又は貨幣そのものは何等價值を有しないか。

貨幣を價值分母として理解する時貨幣の價值の問題は Paradox である。それは恰も共通分母そのもの、従つて分子が統一されんとするその關係を考ふることをなして分子を求めんとするやうなものである。全く矛盾した思考！共通分母即ち貨幣は存在する總ての價值と同じだけの分子を持つが、それ自身固有の大きさに對する一つの分子をもつことは出來ない。蓋し共通分母は一つの抽象的價值單位であるから。

一つの抽象的價值單位は何等價值を持ち得ない、それは論理的に自明なことである。しかし貨幣は單なる抽象的價值單位ではない。貨幣は多くの場合具體的な購買及支拂の手段即ち購買又は紙幣の形に於て存在して居る。經濟學は此の事を表はして貨幣は種々の職能を行ふ、第一に價值測定として、第二に支拂手段として云々といふ。茲に粗雑な誤謬が存する。蓋し一つ、唯一つの物は同時に抽象及び具體とはなり得ない。貨幣なる語によつて二つの異つた物、第一に抽象的價值單位、第二に具體的支拂手段が示されること云ふのは正しいであらうか。今日説かれてゐる所は恰も星が一方天

い。しかし價格に及ぼす作用を排除する爲めに貨幣創設をなす場合その原理を見出し理論的に之れを表明することは必要であるが、その以前に貨幣の價値の變動を測るに價格に於て之れを試みるのは問題が誤つた方向から着手されてゐるやうに思はれる。若し人が古典的貨幣學說及びその貨幣創設原理に於て現在優勢な貨幣制度の誤謬を見出し、價格形成に對する擾亂的影響を先天的に證するならば價格方程式の上に經驗的證明を示す爲めの努力もあり得るであらう。しかし靜止せる極を流動せる現象の中に形成し、且つ總ての研究の目的をなす所の原因を、結果と徴候との觀察によつて深く探求するのを怠ることが起るのである。

(大正二一、一〇、七)

「自由貿易か自由生産か」(一)

ジー・エス・ヘクト

松本 幸治譯

本稿は J. S. Heath なる一英人が著した小冊子 "Free Trade or Free Production? 1918" の全譯である。内容は書名の示す如く保護貿易論である。

初期の社會改造論者は富が、或る階級に集積するを見て直に自由貿易は獨占を不可能ならしむるが故に一國に利益ありとせず結論に到達したのである。而る前期の前半に於て食糧不足を告ぐるや、利益の壟斷從て起り、小麥の自由輸入に對する要求が起つた。而此の要求が入れられ其の當時に於ては我國に利益を齎した

安い外國の勞働を以て造られた同種の貨物を買ひ得るのであつた。

勞働階級は屢々保護は生産者を援くることあるも彼等を——消費者としての——損ふことある可しと教へられた。而も彼等は總ての勞働者が自ら生産者であり消費者と共に彼等自らも生産者たる自己に依存してゐるものであつて、理想國家に於ては總ての者が生産者であることを認識しなかつた。

乍併勞働者の中でも最思慮ある者の多くは、現在に到つて疑問を懷き始めたのである。第一に彼等の注意したことは戦争が勃發した時に、自由貿易論者が唱へた他の論述が間違つてゐたことが證明されたことであつた。總ての小英國人は自由貿易論者であつた。總ての小海軍々人は自由貿易論者であつた。獨逸は戦争の事を考へてゐないこと云つた者は、自由貿易論者であつた。戦争は六週間以上續くこと能はざる可しと云つた人々や、街路は失業者を以て充滿する可しと云つた人々は、自由貿易論者であつた。されば經濟學の専門家は、自由貿易論者に思ひ始めた。更に彼は我國ならざる者に頗る不思議に思ひ始めた。更に彼は我國自由貿易が或る種の産業殊に新興産業を不利な地位に陥れ其の發達を阻害したことを、又食糧の生産を阻げた結果、我々が絶對に他國に依存する様になつてゐたことを知つた。彼は石炭、綿花、羊毛、コ、ア、靴、菓帽子、その他これに類する大自由貿易産業が果して最重要なるものなりや否やに就て疑問を持ち始めた。而るや彼は重要産業は機械工業、化學工業及び其の他の樞要産業にして多くの熟練と智力を要し且つ最高の賃銀を與ふるものなることを知るに到つた。彼は又農業が食糧供給の問題を離れても、一箇の重要さを持つものであることを認識するのである。此の事の理由は後に到つて説くであらう。

其の結果悉ゆる物の自由輸入の希望が起り、畢に(英國は其の當時に於ては最も進歩し、事實世界に於ける唯一の製造國であつた)我々は専ら原料品を輸入し製造品を輸出するに到つた。其は我々の知るが如く、各國の理想とする状態である。

飢饉に瀕せる國家の上に此の如くして與へられたる利益に因て、初期の自由貿易論者は自ら智的優越の強固なる地位を建設し、其を彼等は今日迄驚く可き成功を以て維持し續けて來たのである。總ての議論に對して(我々は彼等が未だ重大な反對に會は無かつたことを是認するものであるが)彼等は常に立證しう可く、或は立證しう可からざる事實の巧なる論述を以て應答し、或は「貨物は貨物を以て支拂はる可し」と謂ふが如き力強き答辨を以て答へるのである。此の答が多くの關稅改正論者をして沈黙せしめたのである。若し窮地に陥れば彼等は此の如く述べる、「自由貿易の問題は己に立證された、而如何に國家が其の採用に依て利益を得たるかを見よ」と。此の智的優越的態度は現今の悉ゆる自由貿易論に於て瞥見するところである。

自由貿易論が疑も無く國家に利益を齎した當年の經驗と挿話とは、勞働階級並に中産階級(即選舉者の大多数である)の大多數の中に一箇の信念を作つた。其は自由貿易とは自然的な状態(自由と云ふ言葉からして)であつて彼等の利益になるものである、從て自由貿易論者は彼等の味方である、而如何なる保護の導入も彼等の利益に對して有害であつて、生活費を増加し、彼等の不利益を齎し、併も此れに對する賃銀の増加は皆無であること謂ふのである。然れ共一國のみの自由輸入は産業上の實際的獨占を有せる國家の状態と同様一箇の人爲的狀態である。貿易すること、換言せば賣買すること、生産すること、は何れが果して重要なりや。

更に思慮深き者は、若し自由貿易が我々にまつて利益ありとせば、何故に諸外國は保護に依て立派に成功せしかを疑ひ始めるのである。而自由貿易論者は、彼等は賢明にして勤勉なるが故に、保護あるに拘らず成功したのであると答へる。然れ共勞働者に他國人の賢明なることを教ふるに、我々も亦自由貿易を有するが故に賢明であること教へるのは一箇の不可思議である。若し保護の「不利益」に拘らず生産に於て我々を凌駕しうらば、諸外國は事實我々に勝れたるものであるに違ひない。而も彼等は又輸出に於ては、數量に於て然らずとすも、品質に於て——即新興熱線産業に於て——我々を凌駕するものである。

自由貿易又は自由輸入の原則に従へば、或る貨物の提供せられる價格が、國內生産者が其に對して求める價格よりも安い時には、其が何處に於て生産せらるべきやを問はず、其の貨物を買ふのが正しいのである。從て自由貿易論者は、若し外國の價格が内地の製造業者の販賣價格よりも五歩だけ安ければ、此の五歩は我國にまつて絶對的利得を示すものであると謂ふ事を我々に確信せしめようであらう。

乍併我々は此の説明の反面を觀察して見よう。今此の購買が大規模に行はれたりとする。然る時に「我々が我々に自ら製造しうる物を外國から購買する事に因て五歩の節約をなしたることに對して、我々は一産業の完全なる閉塞に基く損害を負擔しなければならぬ。自由貿易論者は其の問題でないこと云ふ。勞働は一産業を離れて他の産業に吸収せられるであらう。然れ共問題は直に起る。如何なる他の産業に勞働が吸収されるのか。今其の吸収に要する時期の問題を全く離れても、勞働者は原の産業に於て最も其賃銀を得てゐたのであるから、彼等にまつて其の産業が第一次的のも

若し富の創造が生産にのみ依存するならば、其の生産が何等拘束せられざる事が——換言せば如何なる種類の不正競争よりも保護せられる事が——生産された貨物の自由交換よりも、一國にまつてより重要なことである。

自由貿易の必要は常に力説されて來た。乍併一國は貿易に依て、或は商品の交換に依て、利益をうるものなりや否や。我々の貿易の大部分は國內商業である。即單に、我々自身の間の交換に止る。此れが國の富を増加し能はざるは明である。外國貿易に於ても原料品資本、乃至半製品を輸出し、其の代りに精成品を輸入することに依て一國の富は増加するであらうか。一國一年間の富の増加は大部分何れが生産し、輸出し輸入するかによつて定まるのである。我々は貿易の重要な點は主として我々が欲せざるものを、欲するものと交換し、取引の後に賣手が利益を得ると謂ふ確信にあることを知つてゐる。反對に取引が失敗して損を招くこともありうるのである。

自由貿易は制限を意味しない。然るに制限は存在して來た。例令自由貿易の下に於て、或種の産業の間には協約が存在した、又事實獨逸と協約があつた。我鐵道會社は國內生産者に比較して輸入者に特惠料金を與へた。かくて事實生産の上に、國內生産者の貿易の上に、一箇の制限を置いたのである。總ての保護國が此の地に於て賣ることが出来るのに、我々は彼地に於て關稅の障壁をもつてゐるといふ事實は又生産上の一の制限であつた。

勞働組合員及び或種の勞働者に對して諸外國に比し高い賃銀を支拂ふことは、國內市場並外國市場に對して、生産上の制限を行ふものであつた。然も消費者として勞働組合員は容易に彼等自ら造る貨物の代りに、のであつたことは明である。從て彼等か此の産業を失ふ時には、彼等はより少き賃銀の支拂はるる産業に従事することに甘ざる可からざるは洵に當然の事である。其の結果は勞働者が損をするところになる。

更に、若し産業が完全に閉塞せられるならば、基の設備の全部は不用となるであらう、其は富の大損失を意味する。而も此の産業が閉塞せられ、我々が到底競争し能はざるに到れば、外國人は其の時彼の欲する儘に價格を引上げるであらう。併も我々はその價格を支拂はざるを得ないのである。英國勞働者は事實ハルデン卿が稱して賢明なりとなした獨逸人が、彼等の不利益を招いても當地に於て「安賣り」(ダンペン)なる意味を如何に解釋するにしても)する程暗愚であつたこと考へるのであるか。洵に彼等は暗愚ではなかつた。彼等は我國の産業を破壊し、我々が利益を得て發展するのを阻げ、我國の産業組織を破壊して生産費を高め外國市場に於ける我々の競争力を殺がが爲に「安賣り」をしたのである。彼等は又廣告の爲に「安賣り」をしたのである。彼等は又廣告の爲に「安賣り」をしたのである。其の報復として投賣りをする事が出来なかつた。

前述の比較に於て、我々は外國の販賣價格を内地の販賣價格より五歩安いと假定したが、此の場合前述の損失に加ふるに生産者は又彼自身の利益を失ふ。而し若し此の利益が僅に五歩と謂ふが如く少額なりとせば獨逸より購入するに因る全部利益は此の取引に於て失はれたのである。自由貿易論者は直に云ふであらう、否々、其は假令製造業者に利益を與へずと雖も、國家に利益を與へたのである。乍併製造業者も亦國家の一部である、而も一國の經費に對して多額の支出をなすものである。如何に多額の經費が、課稅に於て重大な影響を蒙るかを見よ。更に我々は製造業者が何等の

利潤を得ずして併も特別に高い賃銀を支拂つてゐることを考へても宜しい。然る時には損をする者は労働者自身である。兎に角、我々は國內生産の減少に因て、價格に於ける利得を差引く可き非常な實質的損失があることを知るのである。生産費の増加(生産費と云ふのは製造業に對する理論的費用を意味する)を來すものは一國にとつて不利なものであるといふことは、自由貿易論の原則の一つではないか。若し然りせば高い賃銀は一國にとつて不利であるに違ひない。英國労働者はこれに對して何と答へるか。一産業に於ける高い賃銀は、他の産業と比較した場合に、併し其は労働者地位に陥れしむることは明であるが、併し其は労働者を利益する。又高い賃銀が熱心に基く場合に限り、其は國家をも利益するものである。

國富の生産。

我々は今や此の問題を一層精密に検討し、價格に於ける節約に對して評量せらる可き、製造乃至生産を通じて一國に與ふる實際利益を研究するであらう。

需要供給の法則を包含し、經濟學の自然法則に就ては多く論じ來られたのである。而も又人為的制限に對する反對論が、此の如き人為的制限が利益があつたか無かつたかに就ての證據を與へないで、又此等の制限が單に人為的であるを謂ふ以外に他の理由からも反對せられるを謂ふ事を明にせずして多く唱へ來られたのである。

乍併若し我々が、人間の原始的狀態に思を廻らすならば、我々は此等の所謂經濟法則が存在してゐなかつたことを見出すのである。第一の、而も多分唯一の經濟法則(其は經濟學の一部とは考へられないのであるが)は、人間は其が生産するに足るだけの生産をしなければならぬと謂ふことである。彼が此の法則に従て生活

し、其れ以上生産せざる限り、彼は富を生産しない。彼が彼の必要以上に生産するや否や、富の生産が始る乍併富の生産を奨励する總ての物は人為的である文明は絶対に人為的である。自然文明を謂ふが如きものは存在しない。従て最高の文明は當然人類にとつて利益ある最大の人爲物を意味する。其れ故に我々は人為的なる制限の問題に基く論難、及び反對を、全然是認しないであらう。更に學者は、制限が積極的及び消極的たりうることを知つてゐる。而も若し總ての制限が取除かれねばならぬ時には、其は等しく兩者を意味するであらう。或個々の場合に於て、或種の制限が或種の産業に利益を與ふることもあるも、若し制限が一般的に不利益であるならば、其等は全體として利益ありきなし能はざるは明である。

今や我々は富と、其の生産に就て考察する。

富に二種類がある、自然財と、可能財と、これである。而も其は二つの方法を以て生産される。自然と、人間と、これである。我々は茲に於て其を、これ以上定義する必要がない。我々の關心するところは、人間の力を以て造られたる富に關するものである。第一に我々は世界を全體として考察する。何者若干の考察は、國家の富を考察するに於て全然異なるものがあるからである。世界の富は、全體として人間が消費する以上に生産する場合にのみ増加するのである。人間は彼が造る富を浪費することも出来れば、其れを貯蔵することも出来る。我々は常に富の交換——世界の富に何等の變化を與へざる賣買貿易——と、富の滅失——生産されたものを消費し、消耗すること——との間に區別を設く可きである。世界の富を考察する場合に、富は勤勞に依て生産されないのは明である。富は與へられたる勤勞に依て移轉するかも知れない。乍併例物を移

轉するを謂ふが如き勤勞は、事實必然的の損失であつて、世界の富の一部をだに附加するものではない。否事實生産的たりう可かりし勤勞を消耗することに依て生産を阻むるのである。平易な言葉で云へば、若し各國が其の國の必要とする總ての物を生産することが出来たならば、此の如き移轉は必要でなくなり、多くの勤勞が生産の爲に利用せられたであらう。海と運送に就て使用せられる勤勞は、多く東印度の水夫、支那の水夫、其の他低い階級のものであつた。而も其れが安い賃銀の支拂はるゝ仕事であつたことは、水夫達の實銀引上運動に依て示されるのである。

再び富に就て考察する。富の生産が速であればある程——即精力の消耗が少くなればなる程——より長き生活を人類は過すであらうし、必要な労働時間は一層短くなるであらう。此の考察より、世界の各地は其の地が最適當してゐる物を生産す可して基本的經濟原則が生ずるのである。此に對しては、我々は勤勞、運送、其の他の費用を考察しなければならぬ。乍併此の費用は普通小なる割合を示し、商品の種類に依て異り、最も人為的であるから之を無視する方が簡單である。此の經濟原則は其れ故に、我々に世界人類が生産の最易なる地方に聚合す可しと謂ふことを示すものである。此れに反對して人類は生活の最も快的な地方に聚合するかも知れないが、我々は此れをも亦、今の問題から除外するであらう。

多くの此れ等の問題の考察は、食糧が必要財たると同時に享樂財たりうるが故に、食糧を以て生産せらるゝ唯一の財なりと假定すると、問題は一層簡單になつてくる。今食糧のみを考察する。——若し地球の半面が世界の總食糧を生産しうるをせば經濟原則に従つて世界の全人口は此の半面に移動す可きである。世界の

二つの部分が、生産に就て正確に同一の條件の下にありう可からざるが故に、此の結果は絶対に論理的である。此れ迄我々は「國家」なる言葉を用ひなかつた。我々は單に世界を考へた。我々は國際人であつた。我々は如何なる國家たりとも其の欲する場所に移りう可しと云つた我々は全世界が亞弗利加に聚合するかも知れぬと考へた。換言せば、紙上で遂行された經濟學の基本原理は國際主義に外ならないのである。而總ての人々が等しいのみならず、(等しい二人の人間を諸君は未だ曾て知らないのであるが)總ての國家が、其發達、其の傾向の如何を問はず等しいものであつて、其の國を空け渡すものであるとする觀念は——其れは無稽である。

此の如き事情は決して起りえない。人間が家庭を造り、家庭を愛するは、經濟法則にあらずして、自然法則である。其れは覺さるゝことを許さない。

國家の存在は文明の發展である。而して一層我々が國際主義の裡に近きうする時には、各國家間の協約は出來る限り各國家の利益の爲である。

我々はかくて各國家は、其國家が最適當せる物を生産す可きであることを知るのである。而此の事は如何にして實現せられるのであるか。(未了)



筆隨と行紀

南國印象記

横本 政一

椰子の樹茂る南の國、綠色の海岸持つ南の島ニラ(Niara)と呼ぶ水草があつた。朝には此の岸に、夕には彼岸に漂い、暮す浮草の身の緩かな流れに浮んで河を下り、綠なす海の邊に群り集ひてその花の美しさを競ひ合つてゐた。この澤山のニラ(Mangrove)源ふ河邊の里は、やがて Manila—Manila と名付けられなければならない。今も尙煙吐く船泊るマニラの真中を貫くパシク河の岸邊には愛らしい浮草ニラ三ツ昔の佛をその儘に流れのまに——漂つてゐるのが認められる。

南海の船路

上海より一千餘哩離れた平和な航海を終へて、八月八日東雲を破る朝日に共に呆樂島の一角、あこがるマニラの港を訪れた。その間所謂天候晴明にして浪立たず砂漠の砂山に似た起伏を示せる背海岸を靜かに南に進んで行つたのである。旬日前に汕頭の平和を攪き亂して幾萬とも知れぬ生魂を奪つた海の浪は思へ

ぬ静けさである。緑の潮吐く姿の珍らしき、龍巻の物凄く光景、聖い感じのするこの掛橋、朝には奇形に富む雲の峯、夕には青白い月を圍む數限りない星辰の眺め、舟人の悦びを體驗して今更ながら舟旅の愉快さに酔ふ。若し夫れ月光を踏んで甲板に出でんか、銀鱗きらめく夜の海は船側にざわめく音を立て、私等をウエルカムすべく、甲板の物陰に奏する船員のマンドリン月に向つて吹き切る巨兄の尺八の音、さてはザルンより洩れ來るピアノの音は天空の星のまばたきと和して麗はしいシンフォニーをなして、私等に大きな調和的氣分を與へて呉れる。——自然讚美の歌は自ら咽喉を吐いて出て來る。空と水とのみに包まれた寂しきは聽て乗合ふ人々の間を鎖ぐ愛の心となり、不自然な面おも嚴重なる金錢的差別を排して迄湧然と湧き出する親しみの念を感ぜずには居られない。それは靜的だが麗はしい平和である、澤山の人の蠢動き争ひ合つてゐる世界にその儘持つて行き度い様な平和である。暇らしい事務員を捕へては駄辯を續け、無聊に苦しんでゐるらしいドクターを相手にしてはゴルフを遊んだ。かくして暮した五日間の悦びの國も立ち昇る朝陽と共に消え失せて、船はマニラの港奥深くはいつて行つたのである。

米國政府の帝國主義的保護政策に禍ひせられたマニラにおける外人の上陸の困難も、私等は假りに一等船客の名義を貰ひ受け得た事に依り容易に避ける事を得た。加之現代の金拜政治の恩恵に浴したと云ふものかブルジョアの假面を授けられた爲に、檢査も手荷物検査も形式的に終了して無事マニラの地に第一歩を印する事が出來たのは何よりも幸ひだつたと云はればならない、この何よりも幸ひだつた故に安堵の息をつがなければならぬ理由は即ちその三等船客の受くる非人

格的虐待である。マニラに上陸せんとする外國人(他國人はいざ知らず少くも日本人)にして三等船客なる者はその身分の如何を問はず、總て移民扱ひを受け檢査の名の下に移民小屋に投ぜらるゝのである。この地獄小屋と稱せらるゝ小屋に三晝夜留置せらるゝ事が如何なる苦惱を吾人に與へるかは何人もよく想像し得る所であらう。従つて私等が無事マニラに上陸し得たこと云ふ數語には絶大の悦びの含まれてゐる事を知らねばならないのである。無事に上陸した私等は先輩諸兄の御厚意に依つて指し向けられた自動車を驅つて一先づ南洋商會社の事務所に着いた、そしてこの旬日のマニラにおける滞在は會社の支配人をしてゐらるゝ吉村氏並びに中山氏の御世話に依つて會社の社宅に御厄介になる事に決した。

フイリピン大學

宿所が定まるに同時に私等の活動は開始せられなければならないがなかつた。即ち船中で御懇意になつた長崎高商武藤教授並びにフイリピン大學の田中教授夫妻に伴はれてフイリピン大學を參觀する事を約してあつたのだ再び自動車を驅つて大學に至つたのは街の活動の始まる九時過ぎである。

大學は市の東北に位してゐて、ビジネス、クォーターと住宅地を區分する位置にあり、その兩者を結ぶタフト、アヴェニューを挟んで、その兩側に各科の教室ホール病院、宿舎、教會等が散在し、その間は一面美しい芝生で處々紅い花咲く熱帯の樹木が涼しい木陰を造つてゐる餘裕ある有様を見ては、流石に文化設備に努力するに聞か米國政府の眞面目さも覗かれて奥ゆかしい。私等はN教授の御紹介で多くの教授に面會して後各教室を參觀した。二三時間の參觀でその大學の内容充實の程度を推測する事は私等にまつては殆んど不

可能の事であるが、少くも私等がその圖書館等に依つて受けた印象はその内容の頗る貧弱な事であつた。實に於いて果して如何程の優秀さを持つてゐるか私等の明確に推し得ない所であるが、宛に角その量において、その設備において極て小規模であるのは明かに認められた事實であつた。それは勿論大學の創立日尙淺きにも依るであらうが、又これが植民地に通弊である文化の不發達に依るのではなからうか。大學學生は土人も居れば米人もゐてその數幾千人、教授は百餘人あるさうである。學生には勿論男學生あり、女學生あり、それが何等差別的待遇を受けない男女共學の制度に依つて一教室に男女學生が顯然として講義を聽いてゐる有様は、私等にまつては一寸珍らしい光景で面白く、且つ男女問題を妙に偏頗に考へてゐる我國教育者に、一考を愚はし得る様に思はれないでもなかつた。婦人のプロフェサもあつてレクチュアをやつてゐる授業時間は熱帯地方であつて午前中並びに夜間の二回に分割せられてゐる。従つて夜間に授業時間を有する學生は、概し晝間(Office)の仕事を終へて後、涼風吹く五時頃より學校にやつて來てゐる。

マニラの夕

Dancing Hall

マニラの市街の特徴は、米國式な現代的市街と古城廓を周圍に持つたインタムロスと稱する西班牙風のWall cityとを併せ持つ事である。前者は現今の活動區域で、従つて繁榮の焦點は此處に集中してゐる。後者は昔の繁榮の名残を止むもので、只その中には種々の官衙教會の散在してゐて、守備兵の寄宿に當てられてゐる個所もある。この城壁の外側の廣場には法外に廣いゴルフ場、クリケット、グラウンド、テニス、コート等が隣接して存し、それに隣りするルネタ公園と共

に市民の行樂の場所である。

この商業區域とインタムロス並びに町の周圍にある住宅地よりマニラの市街は造られてゐるのである。私等の宿舎それは大學の北部(University Hill)と呼ぶ所に近い南洋商會社のメスである。紅色の花を持つたフアイアトリーの並樹路に臨んだ物靜かな場所である。月ある夕べなど、フェランダールに出で、並樹より洩れ来る月光を全身に注ぎ乍ら、日本の事などを打ち語つてゐる時、向ひの家からはピアノの音が聞えて來て心地よく薄暗い並樹路をさし照らす自動車のヘッド、ライト或はかつくの音して過ぎ行くカラムタの轢を見ては何處かの夜會に急ぐものさ推し得られ、異國情緒は四圍に溢れてゐる。夕べの女神に誘はれてアヴェニューを出でルネタ公園の附邊をそとる歩めば、刃の様に互え切つた南國の青白い月の光はざわめく椰子の樹の葉を透して地面に踊り、夏の夜をあこがれる若者の群は三々五々樂しさにさまよふてゐるのを見る事が出来る。散在してゐる土人の家よりは妙なるギタラの音が洩れ薄汚いニツパ、ハウスよりも輕快なダンシング、ミュージックの音響器が聞える。マニラの夕の音樂的色彩の多いことは誰もが熟知してゐることである一週間に二回ルネタの音樂室で奏するオーケストラを聞くべく人々は各自自動車、馬車で馳付け快く之れを聞き或は私かに之れに和して小聲に歌つてゐる様は非常に氣持のよいものである。かくてニンダクターの打ち振るタクレのきらめきに足早や夏の夜は過ぎ行くのである。

音樂に關連してマニラの夕を飾るものはダンシングホールである、町並れに散在してゐるホールへは月影を踏んで集ひ集る若き男女の群が月三更を過ぐるをも得知らず、濃婉な氣分に充されつゝ、愉快なりづみに

合して男女相擁して舞ひ狂ふ様は嬋妍と云はんよりもしる淫蕩なるかなである。所謂輝り輝きな衣服を着けたダンシング、ガールを擁して大きなホールの中を飛び廻る雄蝶雌蝶の姿は確かにマニラのキヤラクターリスチックと云ふべきである。ホールには他に家族專屬のものあつて、そこには眞面目な好踏家がこのフラウと共に樂しさに踊つてゐる。此上は所謂ダンシング、ホールに關する所だが、この他ブライベイトには處々に舞踏會が開かれ、その盛んなる事は外國人就中ダンスの味の分らない日本人には全くの驚異である。彼のカーニバルの日、ルネタ公園に於いて紳士淑女連の寄り集つてなす大舞踏會はマニラに於ける特筆すべき年中行事の一である。

闘鶏と拘捕

マニラに於ける娯樂は賭博に終始してゐる。毎日曜日祭日に行ふ闘鶏と競馬はこのテイピカルのもので、苟くも二三人の土人が相寄つて野球又は庭球等を見てゐる時には、必然的にこの間には若干の取引が行はれてゐる事の事である。

シンガロンガ附近に宿つて私等が日曜の朝、目覺めた時、非常な驚きを持つ事はその街路の異常に人通りの多い事である。満員電車の連続並びに一方方向のみ陸續と進む人々の絶つてシンガロンガの闘鶏場に賭縛せん爲めだとは全く驚かざるを得ない所である。有名なマニラの闘鶏はバブリックとブライベイトの二種あつて、後者は隨時行つてゐるが、前者は日曜日祭日に一定の會場に於いて行はれてゐるのである。これは日本に行はるゝものさはその性質を異にしたもので、會場は日本の相撲場に似たるもので、中央に土俵築かれ鐵柵を繞らし、關係者並びに鶏が内に居て、見物人は柵外に各若干の取引をなして眺めてゐるのである。鶏

の脚には鋭利な小刀が結付けられ、彼等は互ひに傷付け合ひ時には頭の飛びあり、脚を切斷せられて斃れるあり、その慘虐なる有様は我等初參者を見るに堪えない所である。一勝負は一二分間にしてその間に迅速なる而かも大量のTransactionが行はれるから面白い、この土間に蠢動めき合つてゐる見物人の間を縫つて走る拘機の多數にして而かも大膽なる事は又マニラの一特質である。闘鶏を眺めてゐる私等の上衣のボタンが脱された事は幾度か分らない、ツボンのポケットに他人の手を感じることも頗る屢々であつた。

ダニロー、オプ、プリズン

マニラの文化設備の一として世界に誇つてゐるのはそのピニロー、オプ、プリズンである。即我が國に云ふ刑務所である。抑々刑務所なるものも職能如何の問題は私のこゝ明確に外答し得ない所であるが、少くも社會政策の見地よりする時は、それは懲罰と云ふ意味よりも感化救済を目的として設けられたものではなからうか。社會組織の缺陷より起つた罪人、人生の矛盾から生じた悪人の存在に對しては、共存してゐる吾等はこの責任を負ふを要し、この爲めに設けられたものが監獄である。従つて彼等罪人に對して其社會を害せし事の自覺並びに反省を促す爲の懲罰も必要事であらうが、この反面において人生の争闘に疲れ、人間の愛に登しい彼等に或種の慰藉を與へる感化救済の要素も亦監獄の大きな要素であらねばならないと思ふ。従てマニラの模範監獄は面白い事には入場料十ペリももて獄内の或部分の觀覽を許してゐる。その目的は種々あつて、それを適確に示す事は出来ないが、その一フアクターとして監獄と社會との接觸によつて荒み行く囚人の胸を柔く意味の含まれてゐる事は之を否定することを得ない。一日私等はこの監獄を見物すべくそ

の門を潜つた。その最初に受けた印象が赤煉瓦塀と青色の囚衣でない丈、私等にはそれ程嫌な感と與へなかつた。私等は最初は囚人製品の賣店を訪れた。種々な籐椅子類の家具日用品等が所狭き迄陳列せられてあり、テーブル、椅子等の立並んだ間に居て香氣さうに煙草をふかし乍ら、私等を見らるゝ萬遍なく愛嬌を振播いて盛んに商賣氣を出してゐる看視人を囚人だと思つた時先づ第一に驚かされた。與へられた椅子に座して念の入つた素見をやつてゐる時は、監獄にゐる事を忘れて觀商場に遊んでゐる心持に浸つてゐた。

適當の時期を計つて體操場に入つた。この監獄では夕食前に囚人一同廣場に出て體操を行ひ、これが監獄見物人の主目的であるのだ。即ち中央に聳える高塔の所に見物人は導かれるとその塔を中心に放射狀に立ち並んだ獄舎からは多くの囚人が今出て整列してゐるのが見える。やがて數十人よりなるバンドの奏する曲に伴れて體操が始まる。宛かも中學校の運動會の徒手體操の様に輕ろく、而かも軍隊のそれの様に整然と體操の終り近き頃一方の廣場には米國旗及びフイリピン旗を擁した一中隊餘りの軍隊が現れて盛んに分列式を行ふ。その間奏し續けるバンド、分列式を行ふ兵士が總て囚人である事は全くの驚異である。加之更に大きな驚きはその監獄に、街の辻々に立つ巡査が殆んど囚人生活を終つたものである事である。或種の囚人はその監獄生活に依つて怠惰と虚偽の精神を失ひ、而してある一の職業即ち巡査を拜命するに依りて貧民たる事を免れ得る幸福を享樂し得るのである。實に愉快な社會政策だと思はずにはゐられない。この日私は實に愉快な氣分に溢れて監獄の門を辭する事を得た。

モンゴ屋 (Mungo)

私等が古城壁を有するインタムロスにカラムタを驅

る時、その神々しい天主教の會堂と共に私等の眼を索くものは日本人米店所謂モンゴ屋の数の多いである。モンゴ屋は日本の水金時の謂である。この水金時を好む土人にその製造法が分らない事がこの常夏の南の國に於ける日本人米店を發達せしめた事は頗る大なるものでモンゴは彼地では日本人の代名詞に用ひられてゐる餘り有難くない尊稱である。私はこの話を聞いた時全く苦笑なしにはゐられなかつた。その苦笑たるや、かくの如き微妙なポイントに着想した日本人の機敏さと、この様な職業の外何物をも營み得なかつた初代日本移民者の無慮慮を思ふた時のそれではなからうか。モンゴ屋の尊稱を戴いてゐる日本人はマニラに如何なる勢力を持つてゐるかは内地日本人の最も好んで聞く所である。今でこそ三井物産、大同貿易、南洋商會、太古製糖、東洋汽船、橫濱正金等の歴々がそのヘンプの輸出、石炭貨物綿絲布の輸入等に幾分の勢力を保持してゐるが、我が國最大の爲替銀行たる橫濱正金の支店設置が極めて最近にあつた事實に照して、その勢力の目覚は淺くしてその根柢の甚だ弱い事は直ちに感ぜらるゝ所である。それも前の日本人は何をしてゐたか。曰くモンゴ屋、曰く麻栽培、曰く娘子軍、或は小數の雜貨商等の如きものに過ぎずして、當時文化政策を擁してこの地に臨んだ米國人に比してその姿は餘り慘めだつた。

かくてフリーレン人は米國を畏敬してゐる結果、日本人には常に輕侮の眼を放つ事を忘れないさうである。その彼等のモンゴと呼ぶ日本人に對する輕侮の謂でなく何であらう。只彼等が日本人は自己と骨格容貌等の頗る似てゐるその地理的關係から云つても同一人種である事を信じてゐる事に依つて、彼等の心に親日の思想があるので、我等日本人の或る一部が比島獨立運

動に關連して、或る一種の帝國主義的考へを胸に描ける事は最も危険な妄想である。この比人の日本人に對して有する輕侮にして親密の感情は一つの面白いエピソードで證せられるであらう。去る日、我が田中大將が比島を訪れた時、その守備軍の閱兵を行つた。その時比島兵士の驚歎、並びに喜悅がその絶頂に達した事は當時の在任日本人の總ての認むる所である。彼等は今迄米國人の専有だと思つてゐた、チエノルが彼等の血を分けたと信じてゐる日本人にもある事を知つて跳び上らん迄に驚き悦んだのである。我等としては考へられない程彼等は單純な頭腦を持つた人種であるのを知るのである。その單純な丈それ丈歐米謳歌の氣風は盛んな物で、獨立運動は行ひつゝも歐米心醉は人民の心核に入つて離れず、これが又此島に於いて反面に排日の云々される所以である。智識階級にして眞に日本を理解してゐる人も、その公人としては常に排日主義者である。惟ふに不然時はパンを儲る途を斷たるゝが故である。官廳長官に米國政府の手が延びてゐる以上、公人としての比人には言論の自由だに與へられてゐない裏面の眞想を私等は或る消息源から聞き得た。實に世にも面白いものは日米兩國の感情のもつれである。

日本人クラブの晚餐の宴

マニラに於いて最も美しく愉快だつた時は月照る夕べの日本人クラブにおける同窓會の宴であつた。シンガロンクに集つたのは我輩三名と先輩吉村氏、中山氏並びに中西氏の三方である。夜目にもそれと見らる御殿造りの建物の二階の廳間に合計六名、久方振りに疊の上に座してすき焼をついた時の氣分は涙ぐましく迄も麗しい饗宴であつた。饗待月は今中天に輝いて我等の悦びを羨む様であり、饗にすく蟲の音は我等の

妄言録

俞 兆 兼

享樂に和する様である。我等は涼風面を打つ快い夏の夕を、暫し筒井ヶ丘なる會館にゐる氣分に立ち歸つて語り過した。話は期せずして昇格問題に始まる。そしてそれが一時にばつと擴がつて先生方の噂となり、折田さん、窪田さんに談話の渦が巻き、やがて融けて流れて會館のすき焼に結ぶ。大きな清風堂の家が頭に浮べば、むつかしい顔をした親爺、お嬢さんに懐しみが湧く。Y氏が昔の語をなされば、僕等が現状の説明を引受ける、K教授並びにK書記の八字髯に問題が移り、筒臺の持つた竹内先生の話を聴いて、神戸高商物裏の高い煙突を何やらに話が落ちつく。敏馬濱——運動會——語學大會——試験——商業——商地——交通——商品……。話はぐる／＼廻つて何時になつても盡くる所を知らない。總てのものゝ寢靜まつた十二時過ぎこの遠い外の國にこの愉快な機會を與へ下さつた先輩諸兄の御厚意を謝しつゝ、感激に満ちた自己の宿舎に立ち歸つた。

或男が或男を評して
「お前はよつぱり空想家だね」と云つた。
空想家だま云はれた男は、ニヤ／＼笑ひながら云つた。
「空想もいゝものさ。現實の社會に於て全ての幸福や華やかさから阻まれてる男は空想の中で天才になつたり戀人になつたり幸福でハチ切れさうになるより他に道が無いぢやないか」

或男が或男に
「お前はなんてえオッチョコチョイだ」と云つた。
云はれた男は鼻の先でフ、ンと笑ひながら
「いやどうも難有う。世の中には馬鹿が多いから馬鹿と交際してゆくのはやつぱり馬鹿になりオッチョコチョイのお相手をするのはオッチョコチョイにならなげやならないさ、それがわからない君の方がオッチョコチョイだよ」と云つて唾をべつと吐いた。
此の三のダイアローグをつきまけて出來たのが短齣と云ふ男です。

二

學校にも劇研究會と云ふ立派なものが出來た。大に筒臺文化の上に寄與する所ありと云ふ可きである。之れを機會に大向の定連たる私も一言時代歌舞伎賛美論を述べさせて貰ふ。

私は決して時代歌舞伎の偏愛者ではないが今の所新劇に好感を持ち得ない。私に云はせれば時代歌舞伎即舊劇と新劇とは全然系統を別にするものだと思ふ。一は何處迄も外形的表現の形式により一は何處迄も之れ

を排して内面的に進まんとするものである。その脚本にしても一は科の爲の筋であるに反し新劇に於ては科は、文學的内容の自然表現を目的にしなければならぬ。
一言にして云へば舊劇の基調は形式美にあり新劇は綜合的演出による文學的價值を主眼とする。
扱私が新劇に好感を持たないま云ふのは現今舊劇の有する藝術的魅惑を凌駕する様な文學的内容を有するものが多くないからである。而し私は決して新劇不要を呼ぶ者ではないまへ舊劇によつて美を充分に味ひ得たとしても人は劇藝術の反面なる文學的内容を要求するにいたるは當然だからである。

然し何と云つても私にまつて時代歌舞伎の持つ魅惑は大きい。新劇が生れて間もないに反し之れは幾多の天才によつて洗練に洗練を加へられた藝術である。時代物は荒唐無稽だ、誇張に過る、筋はどれも類型論である、文學的價值が少いと云つて批難する人がある。乍併舊劇に文學を求め人が間違なのである。之れは何處迄も夢幻の中に官能に訴へるものである。空想美形式美荒唐無稽により生ずる大まかな味、悠然たる氣分、グロテスクな色彩美を本領とするものである。その有する傳統的な美、初代團十郎以來幾多の天才によつて完成され統一された美即劇藝術の一面たる美を味はへばそれだけでいゝのである。時代歌舞伎は又新劇と異つて自然味人間味寫實味の踏入る可き世界ではない。私は大時代の歌舞伎を見る度に古い錦繪を行李の底より取出して見る時の如きシンミリと心靜まる美に打たれるのである。

劇研究會員諸氏も何卒時代歌舞伎の本領たる之れ等の美或は超現實的かも知れないが之れ等の傳統的藝術の美を認めて尙その保存發展に力を盡して頂きたい。

雜記 (其二)

大手 潤

「遠く那國を離れて信濃の紅葉を見ざるこさ久し。岐蘇やよからむ。戸隠やよからむ。秋の休みを持ち得ざる身に一入沁むるは信濃のみみち。山路山峽あへぐ石炭粉まぢりの火車も秋は些まで苦痛には非るべし」さかうかき出した昨秋の日記をみると、暫く中古擬古あたりを徃つてゐる自分が見える。幾度か新しき句(これを冒士禮妻氏からかりてパルフェウムエカソテイイカミ云ふ)へ走つた自分もややしき他人の國の言葉に阻まれて再び歸つてゆくは己が國の古めかしき句であるらしい。しかし。なべて藝術道を受し、かつこれに没入してゆく道筋に於て、現實現在の句を逸遠く離らんとする努力と欣求を持つのである。自分は今思ふ。時にしる、處にしる、現在から隔り得るさき始めて幻象なり直觀なりの世界をまのあたり見、かつこれに惹き入れられるのである。(註)そしてこれが自分に於てかの Einbildung それ自身なるのである。

然るがゆゑに、どうしても遂に自分には現在に即した藝術道のみ究める事、云ひ得るならば、Connoisseur-ship することが出来ない。遅かりし、將迅きに過ぎたりし我が足は過ぎし日の跡あるひは遠き彼方の空にその不測の歩みに向けしめるのである。

以上十数行或はこれを稱して「藝術に對する時空の問題」或は「現在の文學への反抗」など、鹿の爪の如くするたぐひのものであるかも知れない。しかし、再びめぐり來りし秋の日よ、わが故郷のみちや今如何にありやとのみ。
聲、頃日友某氏の深き談論の末強く云ひ放ちて「審判」別れたる際の言葉「曾て余が賞しき雜語に載きたるクロオチエが、Die Kunst ist Vision oder Intuition」の數語は未だわが耳をなれず云々。」(同氏獨譯美學原理四講)尙曰く、右の書一冊を振り捨てる勇氣は勿論自分には持ち合せない。且木書參照はかのむつかしき書物の参照、引用、註附のおそろしさを全然自分に感ぜしめない。又曰く、註亦雜記たるを失はざるに至る。呵。(十一月十四日夜)

II ダンセエニの秋

Autumn of Dunsany, Saison de Dunsany 言は奇矯であるが例の愛蘭禮讃をするのではない。舞臺も一般的でなくこの神戸附近の地である。愛蘭藝術への注視更に愛蘭劇への首進、更に更に學校芝居の愛蘭時代の現出、而して實にダンセエニの秋。
愛蘭人の芝居はさうしてやられ易いか。頻々たる劇の研究試演、舞臺藝術乃至小劇場の稱呼、それは誠や今に於て豊麗な華である。そしてその目指すところ行ふところ少からず近頃往來の愛蘭の果實をみるのである。あちこちと愛蘭劇の無難作なる Handling があ

る愛蘭人の芝居はさうしてかくもやられ易きか。更に學校テアトルで何故に多くの愛蘭流行があるのだらうか勿論茲で劇壇の所謂新しい運動さか何さかに融れたり感じたりする恐しき考は自分には毛頭ない、關はるころは愛蘭劇と日本の學校とにある、否
只ダンセエニの秋の一事實に驚げば足る。(思へば自分は日本の學校の學友會の雜誌に載せる雜記を書くのだ。)再言す、それは狭い神戸のまはりの話である。我丘上梨園では今年秋の語學の大會に(十二月九日)再び Edward John Moreton Drax Lord Dunsany のものを拜借して來る。而も英語劇が二つながら二つとも然りである即ち King Argimenes and the Unknown Warrior の The Lost Silchat である。前者は聲も時も違ひむかしの物語、至極粉裝澤山のもの、後者は現代大都會の一隅で行はれる淡白なものである。尙ほ最初前者に代ぶるにかの同じく段世仁卿 The Gods of the Mountains が擧げられてゐたが、これは更に流行のお題目であつた。即ち曾ては東京の某校某校で行はれ、而も數日前御近所の大坂某校でも華々しく賑々しく上演に及んだとのことである。主役端役約二十人よくぞ男に生れたるの態であつたらう。そしてこれは二年程前お隣で物凄くも行はれた同じく段氏 A night at an Inn を同じくテマエ(叱られるかも知れぬが)であつてテマエ專一の學校劇の現状として誠に芽出度沙汰さなるべきものであつた。

面目一新の昨年は筒幕座の三つの英語物の中、一つはクレヨリ夫人のものを以て厭倦したが、他の一つとして同じくダンセエニ氏 The Golden Door があつた。此の段脚に就ては専門流の事は暫く措いても、お隣でも又中山手邊でも二三年前の頃やられたものであると云ふ。

まあ何と云ふ愛蘭の秋、ダンセエニの秋少からずして段氏のもののみはみな神戸の地で喰ひ盡されて了ふことだらう。さう殘つてゐるのは僅に The Glittering Gate と The Tents of the Aas 位だ、雜作もない話だ。しかし、何故にかくおそろしきまでこの人を戀ふるの甚しきや。而も知らざるは道傍の石佛の如き神秘な皮肉な衣を着けた原作者であらう。此の持て囃され方を知らば有難至極か迷惑至極か。否、誠にめでたき御代である。

埋め草の本義

因に曰ふ。筆者亦亭裡に佇むを許されず、如上 King Argimenes 改作 The Chant of the Low Home に馳せて今秋晴の場に一つのロカールを承つてゐるものである(十二月一日朝順應亭にて)
長い間のことである。随分とこれをかくが、而もつひに満足のはほみみを洩し得るべきが殆どなかつた。これは丘を去る日の近きを知つて一段と淋しきことである。みちかき道傍の一本二本の草、而も同じく大地に生きてゐる。と云ふやうに試みられた考へ方感じ方ではなくとも必ずや、我が丘上雜語の埋め草に特殊の重要さが存してゐるに違ひない。此の一年間にこれを確然と掴み得なかつたのは編纂子不明自ら謝さればならぬところであるが只一つ、他からの借り物即ち敬し或は愛する既存の書から得て來る章句のその儘の引用を敢へて採らなかつた一つの態度を認めて欲しい。よしや賡しくもわが生むところわが甦らしむるところと云ふ心根を酌んでほしい。Was nun sag ich?



短歌と俳句

冬日小情

武井勇二

赤々とくるめき燃ゆる大日の人知れずこそ見たるものかも
うつしみの人も小鳥もくるめき燃ゆる大陽の前に香をばひそめつ
人知れず我が見るものか草丘に沈む大日は泣くべかりけり
かゝるとき涙流すと惜しからじ大日輪はくるめき沈む

夕陽

時じくにしぐる、空の雲行き早しと見
つれ九日の月
折々にしぐれ降り來て月よみの笹生の路

は行くに寂しも
夜なきする鶏の長啼きかそかなり掛稻の小路の日夜しぐれに
路べりの笹生に早く置く霜の白く凝りつゝ月明らけし
しんしんと寒き夜路の月光に動くものもなしふげにけらしも

淋しき漁村

——南海大津にて——

黍畑のたり穗なびかせ吹く風は海より吹きて晝くもりたり
黍畑のはてに大きな帆が一つ動くとも見えすひるの曇りに
あからひく海のおもてに櫓を揃へ漕ぎさかり行くあまの釣舟(同じく朝)
聲かけて漕ぎさかり行く釣舟の今や岬の端を廻りつゝ
こゝだくのあまの釣舟おのがじ、水脈光らせ漕ぎたむく見ゆ
聲かけて漕ぎたみい行く釣舟の櫓なみ輝く曉の海面に

無題

ゆるかなる雲の流をみつめたり

幼き心

横尾 緑

人思はる、秋なりしかも
月落ちぬ皇なき夜とはしりつゝも
たゞ淋しさに窓あくるなり
逝く秋は淋しきものよ我が胸に
淋しき秋はひとりさゝやく
あて人のうれひによせて詠りけむ
死もやすけきはかゝる夕ぞ
別れの手ちらとどいなみし君なりし行き交ふ人のプラットにしあれば。
二百里は相去り居れどわが心ひとひ懸へる君が眞胸に。
小夜ふけて君をおもへば何がなし心むすばれさびしさのわく。
つぶらにもみはれる君がまみおもひひと目すごせりさびし此の日も。
わが耳に入らぬことにもうなづきしむかしの君のかの日いとしも。

秋の風

夢前生

赤い陽は釣瓶落しに秋の風
秋の風落葉飛して時雨來ぬ
支那町に賣子を見たり秋の風
堂の壁の樂書や秋の風
物懶きに白酒造る秋の風

冬木立

冬木立落陽に迄も續きけり
冬木立旅鳥飛ぶ早さかな
曙や霧に見え行く冬木立
鳥啼く寺をめぐりて冬木立
冬木立母家の壁の剝にけり

俳筵

葉櫻會

十一月二十七日夜開きまして次の諸句を
得ました。
三太

小春日や帆影大きく波ゆるゝ
落つる日や今赤らかに熟し柿
遠山は皆雪にして小春椽
國境の死火山高き寒さかな

星あかり下駄の音澄む寒さかな

阿閑

曳き船に鴉三つ四つ小春風
日暮里の煙薄れて寒さかな
里の夜に馬車の笛聞く寒さかな
潮満ちて輝く入江小春風
熟柿落ちて知らぬ顔なり山がらす

天外

小春夕を散る花欲しや鐘が鳴る
順禮に暫し火を貸す寒さかな

抽灯

町を出て夜目に沼ある寒さかな
疊冷やし笹に熟柿の轉ぶあり
水ぬるむ河底廣き小春かな
かゝり藻の半ばは干てや小春河
驛前を蛇の目に垂れるシヨールかな

九鼎

晴れ渡り破れ釣瓶と柿の熟れ
柿も熟してもろく落ちけり秋の色
小春日や我と酒飲む影法師
しんみりと熟柿に映えて静かな
芝居出し眼の寛ぎや肌寒き

迂碌

オーバー着てマント重ねし寒さかな
音もなく熟柿の落つる庭淋し
小春日に綱繕ふや浪靜か

凸風

待ち疲れ灰に字を書く寒さかな
釣舟に酒あたゝめて小春かな
うづくまる柴刈女熟柿喰ふ

赤峯

讀書子の頭垢落し居る小春かな
襟巻に願短かきを恨みけり
剃り終えて僧衣繕ふ小春かな
片隅に寒き一人や終電車
乳母がくれる綿にくるみし熟柿かな

阿漢

廊出て土堤道寒き夜なりけり
捨てかねて熟柿喰へば又澁き

浮浪者の唄

かす生

今日はフラ／＼と
この公園へ来た、
名も知らぬこの公園の
樹の枝は昔
やせて

風は寒いが
赤い赤い
夕焼が映る、
ベンチに寝轉んだ、
足元が冷い、
その冷いのを夢に見た、
こんど目がさめたら
あざやかな月が
楕の間から
まばゆく光る光る、

學生文庫新書目 (三)

史論關ヶ原役	和田	天華	一門三〇	
未來は我等のものなり	井口	孝親	同三三	
聖フランシスコの小さき花	本二	村松早苗	同三三	
人及藝術家としての國木田獨歩				
江馬修	豫二	黒本	茂君 同三三	
信天翁の眼玉	辰野隆	本三	金田俊郎君 同三三	
聖書社會學の研究		賀川	豊彦 同三三	
心の王國		菊地	寛 二門 天光	
初恋	石丸梧平	(16)	赤塚武雄君 同三三	
獨歩全集	豫二	黒本	茂君 同三三	
青年時代	國木田獨歩	同	君 同三三	
啄木全集(第一卷小説)	石川啄木			
豫二	北川久二	君	同三三	
明暗の街	谷崎	精二	新購入 同三三	
世の中へ	加能作次郎	同	同三三	
走馬燈	室生	偉星	同三三	
戀愛合戦	宇野	浩二	同三三	
巖窟王	黒岩涙香	本二	村松早苗君 同三三	
出家さその弟子	倉田百三	本二	大塚君 三門 兎	
カレーの市民	カイセル	本三	金田俊郎君 同三三	
獨歩書簡	國木田獨歩	豫二	黒本	茂君 四門 兎
花枕	正岡子規	本三	太田準七君 同三三	



部報

陸上運動部

第十九回陸上大運動會

大正十一年十二月三日

筒臺年中行事の一として、秋の一日を飾る運動會も
昇格問題のため延期してあつたけれども、運動も先づ一
段落ついたので、例年よりもやゝ遅れて十二月三日に
催うした。菊の盛りも過ぎ、紅葉の錦も、やゝ酣を過
ぎて、うすら冷い風が、膚にしむ頃ではあつたが、そ
れでも場を周る觀衆は、無慮數千、千紫萬紅時ならぬ
觀樂の野も化した。新しい試みはなかつたけれども、
一寄宿舍發行の筒臺パツク、商研部員の假裝行列は當
日一の愛嬌であつた。

次に當日の記録を誌せば、

第一回 百碼豫選 (午前十時)

A 一着 中山 靜一 (本三) 一一秒五分四

二着 北村 英夫 (豫科)

B 一着 竹内 佐市 (豫科) 一一秒五分三

二着 三村 俊彦 (豫科)

第二回 鐵彈投

一等 木村 定一 (本三) 三五呎二吋

二等 下里己之助 (本三)

三等 島中貴一郎 (本三)

第三回 抽籤競走

第四回 八百米決勝

一着 天野 弘 (豫科) 二分二三秒五分二

二着 須原 政一 (本二)

三着 宮岡 (豫科)

第五回 走幅跳

一等 下村 榮一 (本三) 一七呎八吋

二等 吉保 (本二) 一六呎二吋

三等 北川 (豫科) 一四呎一一吋

第六回 二百米豫選

一着 竹内 佐市 (豫科) 二五秒五分四

二着 中山 靜一 (本三)

三着 北川 (豫科)

第七回 抽籤競走

一着 佐藤 (本三)

二着 村上 (豫科)

三着 吉田 (本三)

第八回 ホップステップエンドジャンプ

一等 中山 靜一 (本三) 三八呎一〇吋

二等 伴 勇 (本二) 三五呎一一吋

三等 下村 榮一 (本三) 三四呎九吋

第九回 四百米豫選

第十回 百碼競走

一着 糸 谷 組 (本二)

二着 石川 組 (本三)

奏 樂 米國歌集 (十一時半)

第十一回 五種競技

一着 溝口 (本二)

二着 木坂 (本三)

第十二回 三人四脚

- 一着 石川、佐藤、山本 (本三)
- 二着 佐川、小松、中村 (豫料)

第十三回 千五百米決勝

- 一着 天野 弘 (豫料) 三分五十七秒五分
- 二着 藤木 定太 (本二)
- 三着 廣田 喜一 (本三)

第十四回 友團責任レース豫選

- A 一着 神 中友團 一分一八秒五分三
- 二着 和歌山友團
- B 一着 京 中友團 (獨走) 一分二〇秒五分二
- 二着 神 撫友團 一分二三秒
- C 二着 六 陵友團

第十五回 圓盤抛決勝

- 一等 山家 長治 (本一) 八一呎一吋
- 二等 木村 定一 (本三) 八〇呎八吋
- 三等 下里巳之助 (本三) 八〇呎六吋五

第十六回 育啞競走

- 一着 林、鈴木
- 二着 森村、山本
- 番 外 バレーボール模範試合 (一時)
- 東組二一對西組一四

第十七回 五哩マラソン (石屋川往復)

- 番外 天野 弘 (豫料) 三一分〇五秒五分一
- 一着 藤木 定太 (本二) 三二分三秒五分一
- 二着 宮本 重正 (豫料) 三四分一五秒五分一
- 三着 平川 (本二)
- 四着 高井 修一 (本一)
- 五着 小田 八二 (本三)

第十八回 槍 投

奏 樂 天國と地獄

- 一等 伊吹真五郎 (豫料) 一三五呎七吋
- 二等 久保忠三郎 (本三) 一二一呎〇吋
- 三等 中村 春美 (豫料) 一一六呎八吋

第十九回 中等學校八百米リレー競走豫選

- A 一着 神戶 二中 一分四〇秒五分二
- 二着 京都 一商
- B 一着 神港 商業 一分四二秒
- 二着 御影 師範

外 假裝競走

- 本三商研各科對抗
- 會計科 不況時代
- 經濟地理科 各國風俗
- 海運科 つゝひ丸
- 商業政策科 帝國主義、自由貿易、モンロー主義、門戶開放、保護貿易、平和來等
- 社會政策科 小作問題 勞動者問題等

第二十回 實業團六百米リレー競走決勝

- 一着 神戶鐵道局 一分一五秒五分三
- 二着 神戶 驛
- 三着 神戶製鋼所

第二十一回 走高飛

- 一等 伴 勇 (本三) 四呎一一吋
- 二等 傍島 省三 (豫料) 四呎九吋
- 三等 小松 辰雄 (豫料) 四呎九吋

第二十二回 百碼決勝

- 一着 竹内 佐市 (豫料) 一一秒五分二
- 二着 中山 靜一 (本三)
- 三着 三村 俊彦 (豫料)

第二十三回 尋常科女子四百米リレー豫選

蹴球部

關西中等學校蹴球大會

第二回大會を十一月二十四、五、六、七、八日の五日間に亘りて舉行す参加校十四校にて血の出る如き試合を見左記戦況にて廣島一中再び優勝せり。

第一回戦 御影及神二中は不戦一勝者なる。

○神戶一中對神戶商業 六對〇にて一中勝

○廣島一中對關西普通部 三對〇にて廣中勝

○明星商業對甲陽中學 二對〇にて明星勝

○市岡中學對池田師範 池田方棄權

○京都師範對姫路師範 三對一にて姫路勝

○小野中對大阪工業 五ひに相攻め相守り得點一對一の接戦となりコーナー四對三にて小野方の勝となる。

第二回戦

○神戶二中對小野中學 雨中に兩軍大接戦を演じ二中元氣にまかして小野を壓迫し得點二對一コーナー九對二にて二中軍勝つ。(審判木坂)

○神一中對姫路師範 御影師範グラウンドにて二十七日二時半より舉行姫路方一昨日の働き振りに似ず一中前衛の巧パス及ドリブルになやまされ五點を得られたるに反し之に對し三點を報ひ得しのみ互ひに點の奪ひ合ひさの豫想なりしが其の點に關し一中前衛姫路師範に優りて此のスコアあり。(審判清水)

○廣島一中對市岡中學 神一中グラウンドにて二十七日午後二時より舉行市岡よく守りしが廣島の巧妙さに敵せず廣島又チャンスを得たるも僅かに一點を得しのみ結局一對〇コーナー六對一にて廣島勝つ。(審判吉保)

○御影師範對明星商業 引續き三時より明星の先鋒に

A 一着 甲南小學校 一分五秒五分三

B 一着 西灘第一尋常

二着 西宮第二一分三秒

二着 西野尋常小學

第二十四回 尋常科男子四百米リレー豫選

A 一着 西灘第一一分〇秒

二着 西野

B 一着 住吉小學校 五九秒五分四

二着 西宮 第一

第二十五回 高等科男子四百米リレー豫選

A 一着 西宮第一 五五秒五分三

二着 楠 小學校

B 一着 西灘第一 五五秒五分二

二着 住吉小學校

番 外 友團優勝旗返還式

和歌山友團 (三時三十五分)

第二十六回 友團責任レース

一着 京中 友團 一分一六秒五分四

二着 神中 友團

三着 神撫 友團

第二十七回 抽籤競走

第二十八回 棒高飛

一等 山道 福松 (豫料) 九呎六吋

二等 泉 丈太郎 (本三) 八呎

三等 木村 定一 (本三) 七呎九吋

第二十九回 四百米決勝

一着 天野 弘 (豫料) 五八秒五分三

二着 中島

番 外 寄宿舎團體競技

一着 南 寮

二着 中 寮

始まる御影方に壓迫コーナー十一を得たるも明星のFBよく守りて入れしめず結局コーナーの差にて御影方の勝となる。(審判伴)

準優勝戦

○神一中對神二中 御影師範庭にて同日三時二十分より二中方先鋒に始まる一中突撃點を成さんとして成らざる事數度二中又機を得て逆襲するもFBに返されて奏効せず前半は殆んど二中側にて戦はれし得點なし後半五ひに攻め守り一中の猛進二中の堅陣チャンス雙方にあるも頑張りて入れしめず結局コーナー四對二の大接戦にて一中方の勝ちに歸す。(審判清水)

○御影師範對廣島一中 神中校庭にて廣島方の先鋒に始まる御影勇躍して廣島を壓せば廣島又得意のパスにて攻勢に轉ず戦ひ數合にして御影方チャンスを得しも廣島のFBに返され廣島のチャンスと見ればオフサイドとなる再び御影攻めてコーナー一を得たるも廣島よく守りて入れしめず前半御影方六分の勝味にて其の儘後半戦となる後半に入り先づ御影攻めしが廣島FBの長蹴に返され形勢逆轉して廣島の強襲となり御影FBのミスあはや點を成さんせしめGよく守りてコーナーキックさなる廣島此の時と總攻撃の陣形をなせば御影FB再びミスして貴重なる一點を得たる御影奮躍回復に努めコーナーを得るも得點せず廣島又壓して機會を作るこ二度未だ點を加へず御影又々盛り返してコーナーを得廣島方ゴール前の激戦となりしも廣島Gよく守りて入れしめず後半互ひに秘術を盡して戦ひ勝敗未だ豫想を許さざりし時タイムアップとなる御影方FBのミスは五度廣中に敗るゝの因となれり。

準優勝戦各チーム成績左の如し。

奏 樂 歌劇 トラパトール

第三十回 中等學校八百米リレー競走決勝

一着 神戶 二中 一分四〇秒五分一

二着 京都 一商

三着 神港 商業

第三十一回 尋常科女子四百米リレー決勝

一着 西宮第二 一分〇三秒五分二

二着 甲南小學校

三着 西野小學校

第三十二回 尋常科男子四百米リレー決勝

一着 西宮第一 一分〇秒

二着 住吉小學校

三着 西野小學校

第三十三回 高等科四百米リレー決勝

一着 西宮第一 五五秒五分一

二着 西灘第一

三着 楠小學校

第三十四回 學友會對部競走

A 庭球部、野球部、蹴球部、陸上運動部、水泳部

B 短艇部、劍道部、柔道部、弓術部、角力部、登山部

C 輿風部、講演部、語學部、編纂部

第三十五回 各級責任競走 (五時半)

一着 本三 三分三九秒

中川康一 松川省三 渡邊逸郎 川崎金藏

二着 本一 森村順一郎 山家長治 屋山正一

大西泰 三着 豫科 今里麟次郎 西川浩一 竹内佐市

傍島省三

四着 本二 安宅英一 湯川實 藤木定太 吉安秀文

催してきた。しかも我部では一方少壯の學生の英語演説を以て英語の普及と向上を計るに共に、眼覚ましく一般の英語力が發達せしに伴ひ必然わが神戸市の如く名士の英語雄辯に接する機会乏しき地に於ては更に名士を招待して其の活ける英語其の鮮かな雄辯を聞きて一般の教養に資する事の愈々緊要なるを認めて来たのである。

昇格問題も一段落を告ぐるに至るを待ち、即ち十一月十一日(土)大阪朝日新聞社後援の下に本校講堂に於て左記の順序を以て名士招待會を開催階上階下滿員の盛況を以て本大會を意義あらしめた事を我部は深く光榮とする。

司會者 小久保教授

- 一、開會之辭 朝日記者 岡 成志氏
- 二、世界に對する日本學生の使命 荒川 重秀氏
- 三、獨唱「ファウスト」 アウターブリック夫人
- 四、米國土産 中村平三郎氏
- 五、沙翁の現代に與へたる教訓 京大教授 ロムバート氏
- 六、四重奏樂 本校マンドリンクラブ
- 七、日本の精神的鎖國 頭本 元貞氏
- 八、合唱 本校グリークラブ
- 九、歐洲の狀態 スタンフオード 大學名譽總長 ショルゲン博士
- 十、閉會之辭 小久保 教授

荒川氏。日米兩國間に感情の阻隔あるを遺憾とし而て之が主として英語力の缺乏による誤解に起因する所以を説き、國民の國際的信交は政治的たるよりも商業的たるべきにして將來の國交の圓滿を計る必要を力

説せられる。中村氏。都市商工業の發達及び人口の都市集中に基く昨今の住宅拂底を捉へ來り米國の例を示して、アパートメント、ハウス或は一種の信用組合の如き機關によりて住宅問題の解決を述べらる。見るから瀟灑たる紳士にて口輕く話さる。

ロマート教授。各時代の指導者は常に詩人と科學者なる事を明らかにして沙翁は戯曲的詩人であり社會的詩人であり世界的詩人である事而て近代の精神的真教師なるを説き沙翁に於て「ライフ」がポラトリである事を力説し、マケベス、リア王、ハムレットを説き去り説き來る氏の雄辯は氏の眞摯なる人格の叫びとして又朗々唱すべき妙なる英語として當夜の聽衆に多大の刺激を與へずには置かなかつた。

頭本氏。日本が精神的に世界各國より非常に遅れてゐる事を述べ而て世界心は今日の國民が是非有すべき心である事、隨つて心と心、胸と胸が折合ふ事が必要であつて若し十分に言葉が云へない爲めに誤解が生ずる故に英語は單に譯解のみに終らず話し又書く事を必要とすことを明快に述べらる。

ショルゲン博士。やゝ速調にて先づ十一年前本校に來りし事やその變化の大なるを述べ歐洲の大戦を中心として戰爭の慘害不幸より各國の戦後の問題に涉りて順々と説き來り武力による平和は眞の平和にあらざる事を高潮し喝采裡に降壇。

相撲部

色々の事情から兎角立後れて居た相撲大會を十二月二日午後一時から凜烈たる寒風に曝されて舉行致しました。

- 棚橋 (引分)
 - 横田 (引分)
 - 齋藤 (勝、引分)
 - 竹永 (勝、引分)
- 當日一級齋藤は即座初段に列せられました。尙當日應々お出下すつて御聲援に與りました學友諸兄並びに先輩諸氏に深く御禮申上げます。殊にいつもながら小津氏の御援助には一同深く感銘いたします。

柔道後援會々費受領報告

色々御心配をかけて成立させて頂きました柔道後援會の本年度第一回會費御拂込の件御願いたしましたこと早速御送り下さいまして有りがたう存じます。少々受領の報を差上げべきところ私の手落ちから失禮いたしました何とも申譯ありません。乍略儀茲に紙上を以て御報告致します。何卒悪しからず御諒承の程御願申します。

- 石井光次郎君 佐藤 忠男君 中島鐵三郎君
- 中橋 武一君 阪本 徳次君 小宮小四郎君
- 神田 俊雄君 船越中二郎君 反田 喜平君
- 高橋 類次君 小津 新一君 三浦 壽君
- 鎌田 章平君 川越龜一郎君 堀内 泰吉君
- 横井 宇一君 嘉納 純君 野阪喜代志君
- 佃 卯一君 今津儀八郎君 北尾種次郎君
- 安田 幸吉君 竹崎 龜助君 和田 信夫君
- 橋本 博介君 以上順序不同

柔道部

した、寒さに氣後れてか土曜日であつた關係からか、二十校の申込校の中七校しか來て呉れなかつたのは残念でした。部員皆な目覺しい活躍を發揮し、殊に福田、島中、糸谷など目立つて好成績を挙げました、全體としては今までにない好成績を収むることが出来たと思ひます中等部の正五人扱は縣商の三木が名乗を受けることが出来ました。

最後の飛付五人扱には糸谷易々勝收めました。失禮ながら以上を以て先づは會員諸兄並びに先輩諸兄への大會報告に代へさせていただきます。

昇格問題の爲めにしばらく稽古も疎にしながら我が部も昇格豫算がさかしく閣議を通過して一段落をつけてから段々實のある稽古を始めました。元來がゲミ運動であるだけあり外部的に華々しいことは出来ませんがその代り内的活動は嚙猛に進展して居ります。

弓術部

春以來不成績を繰返して居た我弓術部新部員はその不名譽を回復すべく試験後毎日練習に努力した。十月二十二日にあつた阪神聯合弓術射大會に平山、山口、高島の三名を派遣する豫定だったが丁度昇格問題の最中で學生大會等があつた爲に出場を見合せ他日の雄飛を待つて居た。

十一月十九日第三回縣下弓術優勝大會(武徳會支部主催)開催。參加團體八。我部からは新進の平山を先鋒に原田、大内、山口、高島の順で出場苦心して練習した甲斐があつて見事關西學院の鋭鋒を抑へて優勝。傑然たる優勝弓は我部に授與された。當日選手及び其の成績左の如し。

- 平山 (持矢十二本) 八中
 - 原田 (同) 十中
 - 大内 (同) 六中
 - 山口 (同) 七中
 - 高島 (同) 十中
 - 合計 四十一中
- 十一月二十六日、勝つ可かりし戦に常に不運なりし對大阪高商戦を午前九時より先方道場にて舉行。當日雨天の爲め成績餘り上がらなかつたが練習で各自自信があつた爲に焦心らず騒がず一六〇對一九九即三十九本の差で堂々勝つ。當日選手一〇名、持矢各自四十分。

- 先方 本校
- 京極 二〇中 平山 二七中
- 龜田 一九中 原田 二七中
- 杉村 一三中 志賀 一〇中

十一月十一日、大阪講道館有段者主催の紅白試合に左の諸選手出場致しました。

- 皆善戦いたしましたして好成績を残しました。
 - 福本 ×
 - 笠松 △
 - 古川 ×
 - 棚橋 ○ ×
 - 福田 ○ ○ ×
 - 西川 ○ ×
 - 横田 ○ ×
 - 足達 ×
 - 齋藤 ○ ○ ×
- 當日御聲援下さいました先輩深江氏並びに小津氏に殊に深謝いたします。
- 十一月十九日三菱俱樂部よりの招待に接しましたので直ちに左の選手を派遣いたしました。
- 中井、竹水、横田、鹿毛、棚橋
- 中井二段は朝鮮銀行の田中二段と試合ひで勝。竹水初段、三井物産の濱田初段と引分け、一級横田、御影師範の高田一級を屠りました。鹿毛も凱歌を奏しました。棚橋引分け。
- 即ち勝三人引分け二人の好成績を記録しました。
- 二十三日の祭日には大阪高商柔道大會へ左の二選手を送りました。
- 中井 二段 (引分)
- 松井 初段 (負)

前日杉村倉庫の能勢穠氏御來場下され種々御勵ました下さいました上稽古をして下さいましたことを感謝いたします。

十二月三日、當地武徳殿にて開催せられました本縣講道館有段者大會の紅白試合に左の四選手出場いたしました。

徳山	一五中	増田	二八中
平川	二九中	栗林	一二中
三谷	一〇中	大内	二二中
島田	一四中	深町	一六中
花房	八中	山口	二六中
松本	一三中	湯淺	六中
戸田	一九中	高島	二五中
合計	一六〇中	合計	一九九中

十二月十七日、對三高戦を行ふ先方道場にて持矢五〇本。選手五名。(X T 生記)

野球部

商神俱樂部對神陵軍 第二回戦

十一月十二日

去る十一月五日彼神陵軍と戦つて利なく勝を彼にゆづりしより丁度一週後の十二日彼餘威を以つて吾牙城にせまる、依つて吾は之れを神一中校庭に迎へ戦ひ決戦十合の後遂に撃退したり。

今左に戦跡を掲げん。

試合は午後二時半より吾の先攻で開始す、球審栗田、壘審橋本兩氏

△第一、二回兩軍得点なく第三回吾一死の後久保田投手の左を抜く安打に出で二壘を盗み後援に送られて還り最初の一點を先取す、四、五回兩軍入らず。第六回裏内藤三壘に直球を打ちしが稲田の巧守にはよまれ勝島投手に飛球を得られ二死となりしに次打者鈴木大飛球を右翼に打上げて本壘打となり一點を回復して同點となる、第七回此處に於て吾軍奮起し佐々木右中間を

抜いて二壘打を飛ばし一死の後三壘を盗みしに敵捕手之れを刺さんと三壘に高投する隙に生還次いで久保田も右翼越二壘打に出でしが後援なし、第八回彼打順よく今田左前に安打して出で機打に送られ勝島の右翼越二壘打に還り再び同點となる九回兩軍入らず補回戦に入る吾軍さらば稲田先づ三壘後に安打して出で、たちまち二盗し續く河瀬の三捕一壘手の失する間に生還河瀬も後援に送られて還る敵代つて攻めし吾軍壘を抜く能はず空しく凡退す。時に午後四時五十分、四對二吾軍勝つ。

試合時間 二時間十五分

本壘打	鈴木	二壘打	安江	久保田	佐々木	勝島
神	田瀬村	村江	山尾	好田	三	九
商	稲河	木西	安佐	藤寺	久	四
失策	三	三	三	三	三	三
盗球	一	一	一	一	一	一
壘打	一	一	一	一	一	一
安打	一	一	一	一	一	一
得点	一	一	一	一	一	一
打点	一	一	一	一	一	一
打球	一	一	一	一	一	一
失策	一	一	一	一	一	一
球	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一	一
六	一	一	一	一	一	一
七	一	一	一	一	一	一
八	一	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一	一
十	一	一	一	一	一	一
十一	一	一	一	一	一	一
十二	一	一	一	一	一	一
十三	一	一	一	一	一	一
十四	一	一	一	一	一	一
十五	一	一	一	一	一	一
十六	一	一	一	一	一	一
十七	一	一	一	一	一	一
十八	一	一	一	一	一	一
十九	一	一	一	一	一	一
二十	一	一	一	一	一	一

商神俱樂部對協會チーム

十一月十五日

協會チームは御承知の如く吾國唯一の職業野球團にして其の技量仲々あなごり難き強チームなり吾軍最初より積極的戦法に出で絶えず彼を壓迫して遂に八對四にて大勝せり。

此の日風や寒けれど照らす曇らすの野球日和なり吾は軍を鳴尾グラウンドに進め午後二時四十五分

神	田瀬村	村江	山尾	好田	三	九
商	稲河	木西	安佐	藤寺	久	四
失策	三	三	三	三	三	三
盗球	一	一	一	一	一	一
壘打	一	一	一	一	一	一
安打	一	一	一	一	一	一
得点	一	一	一	一	一	一
打点	一	一	一	一	一	一
打球	一	一	一	一	一	一
失策	一	一	一	一	一	一
球	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一	一
六	一	一	一	一	一	一
七	一	一	一	一	一	一
八	一	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一	一
十	一	一	一	一	一	一
十一	一	一	一	一	一	一
十二	一	一	一	一	一	一
十三	一	一	一	一	一	一
十四	一	一	一	一	一	一
十五	一	一	一	一	一	一
十六	一	一	一	一	一	一
十七	一	一	一	一	一	一
十八	一	一	一	一	一	一
十九	一	一	一	一	一	一
二十	一	一	一	一	一	一

對早稻田大學 一対零敗

十一月二十日

故大隈侯記念事業基金募集の爲め西下し關西遠征の途に上れる吾四大學中の覇者早大が先づ第一戦の相手として吾に挑戦し來りしかば吾何條猶豫せんや即ち直に之れに應じ彼を姫路に迎へて戦ひしが彼の壘陣を抜く能はず一対零の大接戦の末吾軍敗る。

此の日や寒かりしが吾戰士は元氣を振つて強敵

を向ふに廻して奮闘せり殊に吾西村投手の強肩より繰出す速球を心地よき位にさえたるコントロール並びに彼を助けて本壘を死守したる捕手木村の奮闘に敵の名にし負ふ田中、天下、有田、永野の強打者連もその長棍を振ふに由なく凡退せしは痛快なりき。

午後二時二十分より姫路中學グラウンドで開戦す。

球審松田壘審村上兩氏 吾軍例によつて先攻す。

△第一回一死の後佐々木投術失に出で續く木村の遊歩する間に三壘に達し本壘をうかひしに三本間に執撃せられて徒しく本壘に噴死す、彼天下四球に出しが二壘を盗まんとして刺さる△第二回兩軍好期ありしも入らず以後兩軍互に好守して入らしめず△第五回敵は正投手谷口を立て、吾が西村に對す△第七回吾一死の後中村右翼右に安打して出で藤尾續いて右前にクリーンヒットを飛ばして續きしも柿木三捕守戸三捕に敵ピンチを脱す、尙も互方投手戦を續けて零對零のまま八回に入る吾軍凡打の後俄然奮起し根本中堅に飛球を受飛してその矢に出で一死の後加藤の中前安打に二壘に達し續く天下の遊左安打に長驅邁る尙好機ありしが吾軍死守して喰止む、九回愈々ラストなり吾軍死力をつくして回復せんさせしが及ばず午後四時十分閉戦す。

本	田木村	江村	村尾	木戸	三	二
校	稲佐	木安	西中	藤柿	寺	四
失策	三	三	三	三	三	三
盗球	一	一	一	一	一	一
壘打	一	一	一	一	一	一
安打	一	一	一	一	一	一
得点	一	一	一	一	一	一
打点	一	一	一	一	一	一
打球	一	一	一	一	一	一
失策	一	一	一	一	一	一
球	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一	一
六	一	一	一	一	一	一
七	一	一	一	一	一	一
八	一	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一	一
十	一	一	一	一	一	一
十一	一	一	一	一	一	一
十二	一	一	一	一	一	一
十三	一	一	一	一	一	一
十四	一	一	一	一	一	一
十五	一	一	一	一	一	一
十六	一	一	一	一	一	一
十七	一	一	一	一	一	一
十八	一	一	一	一	一	一
十九	一	一	一	一	一	一
二十	一	一	一	一	一	一

試合時間 一時間五十分。

△殘壘神戶六 早大四△暴投谷口△△重殺根本、永野

對和歌山中學 二對一敗

十二月三日

東宮殿下和歌山行啓野球を鑑覽せらるゝに付き大スタンドを和中グラウンドに設けし爲之れがスタンド開きに招待せられて遠征し三日午後零時より彼と會戦せしに吾軍日頃の猛打も敵投手井口の奮闘に疎止されて徒しく敗退するの止むなきに至りぬ。

球審川越 壘審小笠原兩氏 彼の先攻。

△第一回吾軍藤尾遊歩失に出で三壘に達せしが後援なく第二回敵三者三振の後吾軍西村四球を選んで出で機打及び敵失に生還して一點を先取す以後好機ありしも入らず之れに對し和第三回西村四球に出で後援に送られて還る△第四回井口劈頭遊二間安打に出で後援及び吾が連失に還一點を勝越して意氣當る可からず以後兩軍投手戦を續けて午後二時十五分閉戦す。

試合時間 一時間四十分。

本	田尾村	江村	村尾	木村	口戸	三	〇
校	稲藤	木安	西佐	中柿	寺	四	二
失策	三	三	三	三	三	三	三
盗球	一	一	一	一	一	一	一
壘打	一	一	一	一	一	一	一
安打	一	一	一	一	一	一	一
得点	一	一	一	一	一	一	一
打点	一	一	一	一	一	一	一
打球	一	一	一	一	一	一	一
失策	一	一	一	一	一	一	一
球	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一	一	一
六	一	一	一	一	一	一	一
七	一	一	一	一	一	一	一
八	一	一	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一	一	一
十	一	一	一	一	一	一	一
十一	一	一	一	一	一	一	一
十二	一	一	一	一	一	一	一
十三	一	一	一	一	一	一	一
十四	一	一	一	一	一	一	一
十五	一	一	一	一	一	一	一
十六	一	一	一	一	一	一	一
十七	一	一	一	一	一	一	一
十八	一	一	一	一	一	一	一
十九	一	一	一	一	一	一	一
二十	一	一	一	一	一	一	一

殘壘神戶五 和中四

對全米軍

十二月四日

全米軍は人も知る米國一流の名選手のみを集めて組織し來朝せる職業野球團之れに對する吾軍は昨日の苦戦にやゝ疲勞の色あれども關西の重鎮と吾も許し人も稱せるもの何ぞ惨敗せんやと細雨の中に戦ひしも流石は野球の本場たる米國一流チーム吾西村の球を亂打して安打十八本得點十七を算す殊にケリーは打數六本にして全部安打を飛ばし第三回は中左間に本壘打を飛ばし吾軍をして手も足も出さしめず、今左にその記録を掲げん。

午後二時五十分よりアリテー氏のプレーに始む。

壘審二出川氏 吾軍先攻す。

△第一回またよく間に吾三者軽く退けらる彼は二安打四球及び吾失に三點を入る△第二回兩軍入らず△第三回吾軍凡退の後彼續々安打し三軍打及びシュエールの二壘打ホフマンの三壘打ケリーの二壘打及び吾失に一點を奪ぐ、その後四回一點五回にスタブソンの三壘打に一點六回四安打に三點八回安打及びミューセルの三壘打に一點計十七點を得たるに對し、吾軍は第五回敵失及び稲田の本壘打に三點第六回安江の中越三壘打ありしも入らず、第九回二安打及び寺戸の右翼三壘打に三點計五點を回復したるも及ばず十七対五にて敗る。

時に午後四時五分、此の試合時間僅かに一時間と五分なりき。

校	田尾村江村木村本戸	安打	三五
本	稲藤木安西佐中柿寺	三盜機安打	九二七零零六五
米	グスタールン	安打	四八
全	スガフミクスレホシ	盗機	一一
	847815629	失球	五三

△本壘打ケリー、稲田 三壘打ミューセル、スチア
ンソン、ホフマン、寺戸、安江 二壘打スチア
ン、シユエール (JK生)

講演部

海外旅行講演會

九月の末に、昇格問題で將に多事ならんとする時に
晝食の時間を利用して、海外旅行講演會を新講堂で開
いた。
聴衆は頗る多い。内容は面白いし、辯士もセスチュ
アー巧に話してゐる所は、正にその光景を髮髻せしめ
る。プログラムは左の通り

- 一、開會之辭 本二 芥川 英二
- 一、往復十萬里 本三 石光 憲
- 一、日下の黒人とのダンス 本三 下里巳之助
- 一、南洋の美景を味ひつゝ 本三 長谷川 彰
- 一、南支雜感 本三 岡田 新三
- 一、閉會之辭 本二 芥川 英二

秋季校内講演大會

十二月二日(土)午後一時から今年になつて初めての
講演大會を開く。翌日は運動會である、庭球角方の
試合と折悪しく一緒になつてゐたので、聴衆は甚だ少
かつたが、熱心な數十名のきよてを前にして、各辯士
も懸命に喋つた。

- 一、開會之辭(急激なる時代の變遷に驚く) 本三 松永 一雄
 - 一、伸びんこする心 豫科 黒木 茂
 - 一、希臘文明と雅典の雄辯 豫科 今井久治郎
 - 一、義理と種かゝればならぬ 豫科 中村 英夫
 - 一、私には分らぬ 豫科 井藤馨志雄
 - 一、プロレタリア擁護のために 豫科 大槻 勳
 - 一、新文化の把持者は誰 豫科 石川 一夫
- 黒本君中村君共に初陣としては上出来だつた。今井
君は雄辯の話をしたんだから、もう少し、しつかりし
て欲しかつた。一つの句切りと他の句切りとの間を、
あの様にぼつぼつあけては、大いに空気をだれしめる
大槻君の演説は何と言つても甘味がある。もつこ内容
がしつかりして来たならば、大向ふをうならせるだら
う。井藤君石川君共に元氣があつてよい、粗雑で荒け
づりであるけれども、段々洗練されて来たならば、大
きなものになるかも知れない。豫科の人は澤山演説す
るけれども聞き甲斐がない。と言ふ人があつたが成程
れには違ひないのであるけれども、もつこ同情して聴
かなければならない。若きには意氣さ、それに伴ふ純
眞があるのだ。
- 一、黒住教倫理一斑私見 本一 石井 馨
- 黒住教を倫理的に考察した演説であつた。黒住教は
腹に力を入れる事であるの、黒住教第一世はさう言ふ
歌を歌つたさか色々の御講話を拜聴して有難かつた。

出張を命ず

大正十二年四月入學せしむべき
生徒募集要項中の主なる事項

- 一、募集人員 豫科第一部百九十人同第二部八十人
- 一、入學願書受附期間 二月十五日より同二十八日まで
- 一、入學試験期日 三月二十日より同二十二日まで
- 一、身體検査期日 三月二十二日午後、同二十三日
- 一、入學試験學科目
 - 英語(和譯、英譯、書取)
 - 國漢文
 - 數學(代數、幾何 平面)
 - 地理(外國)
 - 豫科第二部
 - 英語(和譯、英譯、書取)
 - 國語
 - 商業算術
 - 商事要項
 - 簿記(銀行)
 - 以上

圖書館新着書目

孟買に於ける 2 1 東印度棉花協會	橫濱正金銀行編	一三三
貨幣價值論	大藏省編	一三五
金本位即時恢復論	同	同
Devaluationの概念に就て	笠原 博著	同
増訂滿洲の金融機關と通貨	同	同
爲替券定の研究	編 國際貨幣決済に關する創設案	同
第一編	橫濱正金銀行編	一三二
コル取引の研究	同	同
紐育に於けるコルローン	同	同
貨幣に關する最近の諸學說	日本銀行編	一三四
名目的貨幣論を駁す	同	同
貨幣の本質	同	同
一九二一年度佛蘭西銀行營業報告	同	同
外國爲替に就きて	同	同
戦後の英國財界通覽	同	同
獨逸信用銀行	同	同
増訂貨幣論	同	同
増訂銀行論	同	同
改訂銀行論	同	同
本邦鐵道史上第一頁に記載さるべき事項に就て	武藤 長爾著	一三五
海運研究	住田 正一著	一三八
大戰時代の世界海運	遞信 省編	一三九
株式年鑑 大正十年	野村 商店編	一四〇
紐育に於ける株式換機と其の抑制	日本銀行編	一四一
佛領印度支那普通輸入稅率表 農商務省編	同	一四二



學校記事

學校日誌

- 十一月十九日 大谷英一に商業研究所事務を囑託す
- 十一月二十四日 左記の通り滞在延期を許可せらる
- 十一月二十五日 午後一時より入學試験に關する件、第一回試験追試験に關する件につき教授會開會
- 十一月二十七日 教授岡田英定に長崎山口、福岡の三縣下へ出張を命ず
- 十一月二十八日 東京商科大學教授藤本幸太郎に臨時講師を囑託す(統計學)
- 十二月七日 教授坂西由藏に名古屋市

最新海關稅率表 奉天商業會議所編 二七

支那經濟概覽 第一卷 石川 喜一著 一七三

セレス事情 臺灣總督府編 二六

廈門帝國領事館管内事情 同 一九二

佛領印度支那大觀 同 一四一

北部福建事情 同 一四二

香港要覽 同 一四三

支那商業事情 同 一四四

英領ボルネオ事情 同 一四五

汕頭帝國領事館管内事情 同 一四六

戰時及戰後に於ける南洋貿易事情 橫濱正金銀行編 一四七

東清鐵道南部支線特種物出運狀況 同 一四八

英領印度支那及蘭領東印度之林業 臺灣總督府編 一四九

大正商業取締事務成績 農商務省編 一五〇

九年 臺灣總督府編 一五一

南滿洲鐵道株式會社農事試驗場要覽 滿 一五二

地方の維持と増進 北海道農事試驗場編 一五三

朝鮮鐵道一覽 大正十一年 朝鮮總督府編 一五四

大阪鐵務管內鐵道一覽 同 大阪鐵務管編 一五五

蘭領東印度鐵道一覽 臺灣總督府編 一五六

福岡鐵務管內鐵道一覽 大正十一年 福岡鐵務管編 一五七

東京鐵務管內鐵道一覽 同 東京鐵務管編 一五八

世界綿業の近勢 外務省編 一五九

支那工務資料 京都商品陳列所編 一六〇

中華民國民法草案理由譯文 臺灣總督府編 一六一

民法研究 村 司著 一六二

民法と社會主義 山田 正三著 一六三

地方債統計年表 大正九年 大藏省編 一六四

花菱検査所年報 大正十年 花菱検査所編 一六五

專賣局年報 大正九年 專賣局編 一六六

統計年報 大正九年 青島守備軍鐵道部編 一六七

青島埠頭年表 大正十年 青島埠頭事務所編 一六八

兩館商業會議所統計年報 大正十年 同 編 一六九

名古屋商業會議所統計年報 大正九年、十年 同 編 一七〇

新潟商業會議所統計年報 大正九年、十年 同 編 一七一

佐賀商業會議所統計年報 大正九年 同 編 一七二

下關商業會議所統計年報 大正十年 同 編 一七三

神戸商業會議所事業成績報告 大正十年 同 編 一七四

青森商業會議所統計年報 大正八、九年 同 編 一七五

安東商業會議所統計年報 大正七、八、九、十年 同 編 一七六

大阪商業會議所事務報告 大正十年 同 編 一七七

甲府商業會議所報告 第十三回 同 編 一七八

岡崎商業會議所統計年報 大正九年 同 編 一七九

直江津商業會議所統計年報 大正十年 同 編 一八〇

敦賀商業會議所年報 大正十年 同 編 一八一

仙臺商業會議所年報 大正十、十一年 同 編 一八二

神戸市社會事業概況 大正十一年 神戸市役所編 一八三

外國爲替の實際 成川 圭司著 一八四

再保險論 進藤 紫副共著 一八五

瀬上馬之輔共著 一八六

國際法及國際問題 恒藤 恭著 一八七

國家論 平松 市藏著 一八八

愛蘭及埃及問題に就て 拓殖 局編 一八九

政治學史大綱 小寺 謙吉著 一九〇

戰爭終末に於ける獨逸及東隣諸國通商關係條約 外務省編 一九一

獨逸新憲法要論 池 善一譯 一九二

關領東印度地方制度 臺灣總督府編 一九三

印度に於ける特惠關稅制度問題 外務省編 一九四

米國より觀たる石油問題 同 一九五

國際經濟と國民經濟 堀江 晴一著 一九六

英國住宅政策 簡易保險局編 一九七

米國を中心とする住宅問題 同 一九八

國際勞動刊行第一、二、三、五、七、八、九、十輯 外務省編 一九九

獨逸國經濟評議會 同 二〇〇

中央職業紹介局事業報告 中央職業紹介局編 二〇一

泰國職業紹介事業概況 同 二〇二

職業紹介事業概況 同 二〇三

大正九年海員患者年報 日本海員協會編 二〇四

住宅及土地問題 小川市太郎著 二〇五

社會苦の研究 杉山 榮著 二〇六

婦人及社會主義 牧山 正彦著 二〇七

ホルシエロキズム研究 福田 徳三著 二〇八

日本財政經濟史料 卷四 ラスキンの經濟的美術觀 御木本隆三著 二〇九

殖民政策 拓殖 局編 二一〇

ウラグアイ共和國移民に關する法律及大統領令 外務省編 二一一

グエネズエラ合衆國移民法 同 二一二

亞爾然丁共和國移民法ニ關スル法令 同 二一三

繪花取引所論 東田 藤吉著 二一四

滿蒙全書 第二卷 同 二一五

商業研究所彙報 第八號 同 二一六

同 第九號 同 二一七

筑豊五郡石炭探掘鐵道一覽 大正十一年度 同 二一八

生絲と其の貿易 早川 直瀨著 二一九

商標法講話 三宅毅士郎著 二二〇

法律行爲論 岡 松太郎著 二二一

民法要論 沼 龍雄著 二二二

商行為法 松本 泰治著 二二三

不正競争論 有馬忠三郎著 二二四

日獨對照獨逸民法全譯 吉野 作造著 二二五

二重政府と唯權上奏 村瀨武比古著 二二六

社會哲學の諸問題 巖山 政道著 二二七

政治學 高橋 清著 二二八

復興亞細亞の諸問題 大川 周明著 二二九

米國憲法要論 大石 熊吉著 二三〇

改正會計法規規解 平山慶次郎著 二三一

商業研究所講義集 第五輯 同 二三二

富の研究 福田 秀一譯 二三三

自由港設置論 同 二三四

農業經濟學 河田 嗣郎著 二三五

勞動者問題 手野長次郎著 二三六

ホルシエロキズム研究 福田 徳三著 二三七

西洋社會運動史 石川三四郎著 二三八

慶應義塾大學經濟思潮講演集 小林丑三郎著 二三九

經濟思潮史 同 二四〇

日本財政經濟史料 卷之三 同 二四一

丁卯雜錄 第二 下橋 敬長著 二四二

維新前の宮廷生活 同 二四三

日本文化史 第九、十一卷 滿 鐵編 二四四

滿蒙に於ける各國の合辦事業 第一輯 同 二四五

近代露支關係の研究(沿黑龍地方之部) 同 二四六

新奧諸國の現状 長瀬 鳳輔著 二四七

空間及時間概念 同 二四八

大正十二年の曆 同 二四九

國譯漢文大成經子史部 第十六卷 高瀬武次郎著 二五〇

支那哲學史 石塚 鍊藏譯 二五一

ガントの無上命法 牧野信之助著 二五二

弘法大師傳の研究 久保 良真著 二五三

兒童研究所紀要 第六卷 同 二五四

英國實業教育制度 同 二五五

佛蘭西實業教育法令 同 二五六

圖書管理理法大綱 同 二五七

運動體育上展覽會 同 二五八

近代英國社會主義史 大日本現物協會編 二五九

社會主義批判 同 二六〇

應用衛生學 同 二六一

橋守部全書 第十二 同 二六二

外國貿易概覽 大正十年 大藏省編 二六三

臺灣金融事項考書 大正十年 臺灣銀行編 二六四

國民年鑑 大正十二年 國民新聞社編 二六五

自一九一九年上海港輸出貿易明細表 同 二六六

一九二一年 上海日本商業會議所編 二六七

每日年鑑 大正十二年 大阪毎日新聞社編 二六八

職業名彙集(第一回臺灣國勢調査) 臺灣總督府編 二六九

支那社會史研究 藤 君 著 二七〇

土地爭奪史論 坂上 信次著 二七一

ゾーフと日本 齋藤 鳳輔著 二七二

財政學評論 小林丑三郎著 二七三

最新財政學綱要 宇都宮 卓著 二七四

租稅論 上 小川市太郎著 二七五

史學と如何ぞや 小野 秀雄著 二七六

日本新聞雜誌史 同 二七七

西洋最近世史 同 二七八

連城紀聞 第一、二 小寺 謙吉著 二七九

日本文化史 第六、七、八卷 同 二八〇

近畿遺跡考大坂之部 同 二八一

大日本博士錄 第二卷 井關 九郎著 二八二

西北利の農牧林業 荒木 章著 二八三

廣東名勝史蹟 藤 謙太郎著 二八四

相對律 小野敏之丞著 二八五

相對性理論の諸斷面 石原 純著 二八六

對稱學 附圖付 及 謙一著 二八七

日本文學新史 尾上 八郎著 二八八

國譯漢文大成文學部 第四卷 室伏 高信著 二八九

社會學原論 遠藤 隆吉著 二九〇

佛書釋題 上下 大村西庵、中野實著 二九一

日本文化の傳教 谷本 富著 二九二

日本民族思想の研究 津田 敬武著 二九三

少年青年職業選擇と其の指導 稻葉 第一著 二九四

國家及國民の體育指導 同 二九五

大正十年神戸港外國貿易概況 同 二九六

大正十年生絲検査所事業成績報告 同 二九七

大正十年造幣局長報告 同 二九八

大正九年生絲検査所調查報告 同 二九九

神戸經濟會議彙集 第四輯 同 三〇〇

露國に於ける産業組合運動 同 三〇一

Hartungen, Ch. v. Psychologie der Reklame. 1921. Stuttgart. (vii)+269 pp. 8°	1	1	567
Noivest, Felix. Geschaftevereinfachung und Unkostenersparis Violets Kaufmannische Schriften. Stuttgart, 1922. (vii)+173 pp. 16°	1	1	568
Batardon, Leon. Traite Pratique des Societes Commerciales. Paris, 1922. 889 pp. 8°	1	1	569
Normand, Gilles. Les Entreprises Modernes le Grand Commerce de Detail. Paris, 1920. (xv)+309 pp. 16°	1	1	570
Argentarius. Breife eines Bankdirektors an seinen Sohn. Valhita, 1921. Berlin. 16° 128 pp.	1	2	669
Dalberg. Banko Mark im Aussehenhandel. Berlin, 1922. 79 pp. 12 handbuecher der Industrie- und Handels-Zeitung. Bd. 3.	1	2	670
Kerschagl, Richard. Die Geldprobleme Heute. Leipzig, 1922. 86 pp. 12°	1	2	671
Sonnenschein, Heinrich. Die Bankpraxis. Siebente Aufl. Stuttgart, 1922. 897 pp. 8°	1	2	672
Coelylas, Rene et Tomaz, Robert. L'Organisation du Credit. Paris, 1920. 278 pp. 16°	1	2	673
Descamps, H. Precis d'un Cours de banque. Quatrieme Ed. Vienne, 1921. (viii)+268 pp. 16°	1	2	674
Herbelot, L. et Francois, G. Les Monnaies les Changes: et les Arbitrages. Paris, 1921. (ix)+243 pb. 8°	1	2	675
Poittevin, Henri Le. Theorie des Changes, Deuxieme Tirage. Paris, 1922. 1-2 pp. 8°	1	2	676
Radouant, Jean. Les Rapports de la Banque de France et de l'Etat par-ticulierement pendant la guerre de 1914. Paris, 1921. 219 pp. 8°	1	2	677
Thery, Andre. Les Grands Etablissements: de Credit Francais. Paris, 1921. 319 pp. 8°	1	2	678
Vissering, G. Problemes Internationaux, Economiques et Financiers, Paris, 1920. 116 pp. 12°	1	2	679
Moulton, Harold. The Financial Organization of Society. Chicago, 1921. (xxii)+789 pp. 12°	1	2	680
Murken, Erich. Die grossen transatlantischen Linienrederei-Vorhaende, Pools und Interessengemein schaften. Jena, 1922. (viii)+741 pp. 8° Mit abbl. u. tabel.	1	3	421
Schmaltz, D. Gefaehrliche Gueter als Seefracht. Berlin, 1922. (iv)+152 pp. 8°	1	3	457
Clouac, Paul. La Renaissance de Notre Marine marchande. Paris, 1919. (ix)+234 pp. 12°	1	3	458
Fraget, Gaston. Une Industrie Nouvelle la Magine marchande. Paris, 1918. 108 pp. 8°	1	3	459
Riegel, Robert & Loman, H. Insurance: Principles and Practices. New York. (xv)+513 pp. 8° with tables, and ill. Versicherungsweisen. Erster Bd. Allgemeine Versicherungslehre. Dritte Aufl. Berlin, 1922. (xiv)+431 pp. 8°	1	4	315
Schmittmann, R. Fuehrer durch die deutsche Sozialversicherung in ihrer	1	4	316

Cl. Div. No.

Gestaltung nach dem Kriege. Dritte Aufl. Leipzig, 1921. (xi)+279 pp. 12°	1	4	317
Converse, Paul D. Marketing methods and Policies. New York, 1921. (vii)+650 pp. 12°	1	5	109
Greenwood, W.J. American & Foreign Stock Exchange Practice Stock & Bond Trading and the Business Corporation laws of All Nations. New York, 1921. (xxi)+1048 pp. 8°	1	5	110
Argentarius. Breife eines bankdirektors an seinen Sohn. Die Boerse. Berlin, 1922. 124 pp. 16°	1	5	111
Beard-Falgas, J. De la Negotiation en Bourse des Titres Nominatifs. Paris, 1921. 21 pp. 12°	1	5	112
Bourbeau, Marcel. La Bourse des Valeurs de Paris. Paris, 1921. 385 pp. 8° with many tables.	1	5	113
Peck, Anni S. Industrial & Commercial South America. N.Y. 1922. (xvii)+509 pp. 12° with many maps.	1	9	95
Kawata, T. Glimpses of China, Japan and the East. Tokyo, 1922. 906 pp. 8°	1	9	96
Dejean, Francois. Le Commerce Russe et la Revolution. Paris, 1920. 228 pp. 16°	1	10	265
Cunningham, J. Clinton. Products of the Empire. Oxford, 1921. 299 pp. 16° ill.	2	2	226
Kondo, M. Berichte des Ohar Instituts fuer landwirtschaftliche Forschungen in karaschiki, Provinz Okayama, Japan. Band I. Helt I-9. 119 pp. 8° mit tab. bbl.	2	2	227
Utility Regulation & Rate of Return. Chicago, n.d. 87 pp. 4°	2	4	115
Elmes, Cecil F. Price Levels in Relation to value. Chicago, n.d. 24 pp. 4°	2	4	116
Schneider, Konrad. Treu und Glauben. Muenchen 1902. (viii)+241 pp. 12°	2	4	117
Schreiber, Otto. Handelsbreuche. Leipzig, 1922. 92 pp. 12°	3	3	156
Waldeck, Huto. Deutsches und internationales Kartellrecht. Berlin, 1922. 554 pp. 8°	3	3	190
Montarnal, Henri. Traite Pratique du Contentieux Commercial de la Ban-que et de la Bourse. Paris, 1922. 461 pp. 8°	3	3	192
Milinkov, Paul N. Russia in day and to-morrow. N.Y. 1922. (x)+892 pp. 12°	4	1	785
Tempelery, H.W.V. A History of the Peace Conference of Paris, 1921. (xxiv)+527 pp. 4°	4	2	61
Kawakami, K.K. Japan's Pacific Policy. Washington Conference. N.Y. 1922. (xiv)+380 pp. 12°	4	2	89
Reinsch, Paul. An American Diplomat in China. Garden City, 1922. (xii)+239 pp. 8°	4	2	90
Tokutomi, Hichiro. Japanese-American Relations. New York 1922. (xvi)+207 pp. 12°	4	2	91
Potter, Pitman B. An Introduction to the Study of International Organi-zation. New York, 1922. (xiv)+647 pp. 12°	4	2	92
Kupper, Arnold. Der Grenzzeitungsbeitrag bei Robert Liebmann und sein Zusammenhang mit der Grenzzeitungstheorie. Zuerich, 1921. (v)+114 pp. 8°	5	2	509
Cardanus, Hermann. Fuenfzig-Jahre arveli verband (1868-1918) Mun-chen, 1913. 252 pp. 8°	5	3	791

Valois, Georges et Conquelle, G. Intelligence et Production la Nouvelle Organisation Economique de la France. Paris, 1920. 270 pp. 16°	5	3	792
Deshow, Franz. Verwaltung und Wirtschaft. Zweite Aufl. Berlin, 1922. 42 pp. 12°	5	3	793
Witte, I.M. Wissenschaftliche Betriebsfuehrung Berlin, 1922. (vii)+159 pp. 12° Mit Einer Abblidung im Text.	5	3	794
Hudezer, Karl. Die Wirtschaftskraefte Oesterreichs. Zweite Aufl. Wien, 1921.	5	3	795
Jaeger, Johannes. Die Wohnungsfrage. Muenchen, 1909. 140 pp. 12°	5	3	796
Kleisi, Juergen von. Handels-Zeitung. Bd. 2. Die auslaendische Kapi-talbeitigung in Deutschland. Berlin, 1921. 124 pp. 12°	5	3	797
Pawlowski, Eugen. Der Bankrott Deutschlands. Hamburg, 1921. 188 pp. 12°	4	3	798
Schnitze, Ernst. Die Zerrentung der Weltwirtschaft. Berlin, 1922. 373 pp. 12°	5	3	799
Aron, Andre. La Crise Economique en Angleterre. Paris, 1920. 172 pp. 12°	5	3	800
Lambert, Henry. Pax Eaconomica. Paris, 1920. 316 pp. 12°	5	3	801
Laseaux, Robert. La Production et la Population. Paris, 1921. 334 pp. 16°	5	3	802
Sauvairo-Jourdan, F. La Vitalite Economique de la France avant et Apres la Guerre. Paris, 1918. 276 pp. 16°	5	3	803
Huggins, William L. Labor & Democracy. N.Y. 1922. (viii)+213 pp. 12°	5	4	1033
Rebel, August. Aus meinem Leben. Erster Teil. Zweiter Teil. Dritter Teil. Stuttgart, 1920. (vii)+270 pp. 12°	5	4	1034
Braener, Karl. Die Anpassung der Lohne und Gehaelter an die Lebenskosten. Helt (xvii)+Dresden, 1922. 64 pp. 8°	5	4	1035
Dressel, Ernst Gerhard. Soziale Fuersorge. Eine Uebersicht fuer Stu-dierende und sozial Taeltige. Zweite Aufl. Berlin, 1922. 298 pp. 8°	5	4	1036
Guenther, Adolf. Sozialpolitik Erster Teil. Theorie der Sozialpolitik. Neunter Bd. Berlin, 1922. (vi)+476 pp. 8°	5	4	1037
Herker, Heinrich. Die Arbeiterfrage. Eine Einfuehrung. Siebente Aufl. Erster Bd. Berlin 1921. (xvi)+584 pp. 8°	5	4	1038
" Die Arbeiterfrage. Zweiter Bd. Berlin, 1921. (xiv)+624 pp. 8°	5	4	1038
Bureau International Due Travail. Les Conditions du Travail Dans la Russie des Soviets. Paris, 1920. (cxliiv)+301 pp. 8°	8	5	1039
Guth, Charles. La Grande Reforme ociale. Paris, 1921. 122 pp. 16°	5	4	1040
Jaurès, Jean. Histoire Socialiste de la Revolution Francaise. Tome			

Pig, Paul. 1. la Constituant. Paris, 1922. 423 pp. 8°	5	4	1041
Orvresire, Conquime Ed. Paris, 1922. (xv)+1042 pp. 8°	5	4	1042
Sageret, Jules. Le Syndicalisme. Intellectual son role politique et social. Paris, 1922. 128 pp. 12°	5	5	1043
Sorel, Georges. Les Illustions due Progres. Etudes sur le Deyemi So-cial I. IV. VIII. XV. Paris, 1922. 16°	5	4	1044
Damascie, Adolf. Geschichte der nationaloekonomie. Dreizehnte, Aufl. Erster Bd. Jena, 1922. (vi)+409 pp. 12°	5	5	203
" Geschichte der nationaloekonomie. Dreizehnte, Aufl. Zweiter Bd. Jena, 1922. (iv)+441 pp. 12°	5	5	203
Stieda, Wilhelm. Hildebrand Veckhinhusch. Leipzig, 1921. (vii)+560 pp. 8°	5	5	204
Calmann, Hannus Maximilian. Die Finanzpolitik der Deutschen Sozial-demokratie 1867-1914. Muenchen, 1922. 259 pp. 12°	5	6	820
Huebners, Otto. Geographisch-Statistische Tabellen aller laender der Erde. Wien, 1921. 158 pp. 12°	5	7	197
Enquete sur la Production. Bureau International du Travail. I Memoire Introductif. Paris, 1920. 224 pp. 8.	5	7	198
Wallis, B.C. Essentials of Practical Geography. London, 1918. (xiv)+213 pp. 16° ill.	7	2	55
Brooks, Leonard. A Regional Geography of the World. London, 1921. 559 pp. 12°	7	2	54
Freytag, G. Welt-Atlas. 211 Karten auf 124 Seiten u. Namens-verzeichnis. Wien, 124 pp. 12°	7	5	110
Hickmann. Geographisch-Statistischer Universat-Atlas. 1921. Wien, 1921. 62 pp. 12°	7	5	111
Overzichtshaart van den Oost-Indischen Archipel. Schaal 1:2500000.	7	5	112
Dow, GroveSamuel. Society and its Problems. New York, 1920. (xiv)+595 pp. 12°	11	4	143
Eusign, Forest Chester. Compulsory School Attendance and Chief Labor. Iowa, 1921. (ix)+268 pp. 8°	12	6	103

同窓會

（本部）神戸高等商業學校内
電話（三宮）七三七番
振替口座 大阪四七八〇番

同窓會記事

ニース馬耳塞から

神戸迄

南佛海岸より四十日の海上生活

中川 静

神戸に着いて気がノンビリしてから旅行記の残稿を書くのも變な氣持がするがさりどて以太利止りでは是亦妙なものであると思つて、ニース及び馬耳塞以後を記して見る。

以太利を出發してから第一に足を入れたのは佛國のニースであつた。ニースは有名な避寒地で歐米の士女が贅を盡す爲の町である。年中を通じて天に雲翳がない。サハラの熱砂を過ぎて北上する熱風は水蒸氣の存在を許さない爲であらう。之が爲に天は一碧拭ふが如く地中海は見

渡す限り紺青を湛へて美しい。北には六甲一流の連峯が見えて南は水に濱し、實に以て住み心地の善きうに思はれる。況んや佛國獨特の食膳の佳味あるに於てをやである。

ニース滞在中の一日、車をモンテカローに驅つた。モンテカローとモナコとは一つになつて所謂モナコ王國を形成して居る。驚く勿れ全國といふのが神戸市内の舊合部位に過ぎないのであらうか、渺たる一地带で見渡すといふ程もない。こんな處が何國に併合せられたとて、其の併呑國を強くするにも富ますにも足りないとすれば、王國は却つて平和の夢を繼續し得る僥倖を有する。夫れにしても二十三人の兵士と若干の警官とは存して居る外交と軍事とは佛國に一任して在るさうで貨幣も佛貨が行はれて居る。

モナコに車を驅つた目的物は二つある一は海洋學博物館で他の一は賭博場であ

る。

人も知る如く國民は一切課税せられないで國費一切は皆賭博會社の税金から優に支辨せられる。戦後の歐洲各國が（和蘭瑞西等の若干を除いては）戦後疲弊の絶頂に達し居るに拘らず、此の渺乎たる一王國が春風駘蕩の狀に在るは實に以て奇怪至極である。此の和氣中に於て最近に崩御せられた國王の唯一の趣味は「オシアノグラフィキ」であつた。こんな學問が何時から始まつたものであるかは予の知る所でないが其の研究具の一たる奇麗なヨットは王宮下の小港内に繋がれて居る。さうして海洋學博物館も亦普通の水族館なるものと選を異にして居る。

賭博場では入口で旅券の調査を受け、然る後に大殿堂の中に立つた。見渡す机を取廻らして居る賭博者の過半が女子であつた事、其の賭博方法が極めて子供らしい方法であつた事などに驚かされて天下一公開の賭博場を去つた。

ニースから馬耳塞に行つたが此處には鈴木商店の草加朝雄君が居られるのを幸に、七日の夕から九日の夜迄特別の御厄介になり御馳走を饗けたり、博覽會を見せて貰つたり、買物の世話を受けてたりし

た。

三島丸は十日出帆であるが九日に乗船するやうにと郵船取扱店の外人から言渡されたので、同夜十時頃草加君に送られて船中の人と爲つた。

歐洲大陸の三十八日中伯林とベルンと馬耳塞とで同窓の方の御款待に預り、巴里で渡邊君に奇遇した外には、到る處同窓の方とお目にかゝる機會を得なかつたさうして會員の多數集つて居られる里昂には立寄ることが出来無かつた。夫にしても大陸の觀光は極めて面白く通過し得た。

九月十日の朝三島丸の甲板上から港内を見渡した時に「ラ、ミゼラブル」の牢獄が巍然として海中に聳ゆるを眺めて悚然とした。港内の繫船は三百に近からんと噂せられた。さるにても我が日本船の積荷の少からぬを見た時には一種の快感が湧いて來た。

十三日は以太利の靴先を回り十五日の黄昏にはポートサイドに着いた。四五時間碇泊の後、同地を發しスエズの海峡に入つた。絶えず探照燈で前路を照しつゝ、徐々として南進した。翌十六日午前スエズ着、二時間許りの後には、普通の速力

で紅海を南へくと進んだ。

亞弗利加の東端に在るソコトラ島を過ぎてベルンシャ灣に入つたのは二十二日であつたが、スエズからアデン迄の五日間の暑熱は實に甚しいものであつた。浴槽に酌み込む海面の水温が九十度だと聞いたいけでも熱いことは想像せられると思ふ。アラ比亞から吹いても亞弗利加から吹いても來る風は火氣である。此の調子で行つたら北緯一度の新嘉坡に着く迄には船客は熱殺されて仕舞ふのでは無いかとも想つた、唐朝時代に佛教經典の大翻譯家として名高い玄奘法師の印度紀行を寓意タツプリの小説に書いた西遊記といふのがある。之は支那の四大奇書の一であること皆人の知る所である人はパンヤンの巡禮記に比したり、其の以上の才筆だと褒める人もある。此の書中に玄奘が印度に入る少し前に永劫の火氣に包まれた火焰山を過ぐる記事があるが炎熱の砂漠旅行を誇張したならば成る程永劫の火焰山と言ふことになるだらうなぞ飛んだ事まで想ひ起した。

船體は無論焼けて居る。バゲージ、ルームに夏衣を出しに行つた連中は五分と居た、まらず、着物を取り出し得ずに汗み

ごろになつて飛出し來るものゝみであつた。俄然二十一日の夕暮には左舷の貯炭庫から濛々たる白煙が開始した自然發火である。之が爲に水夫の非役は總出となり、機關長指揮の下に消防に従事したが十一時頃には全く鎮火したので、予は右舷の船室に眠るべく行つた。夜半又々夢を驚かされて見ると今度は自室に近い右舷の貯炭庫に同様の災厄が起つたのであつた。尤も之は譯も無く消されたので再び眠らうとした頃には夜はほのくくと明けかゝつた。

二十二日にソコトラ島を過ぎて二十六日にミニョイ島を見る迄は全く陸も島も見えぬ印度洋であつたが、順風の吹續いたので船は無暗に進んだ逆風のやうに涼しくは無いが、夫でも紅海のやうには暑くも無く、船體の動搖も殆んど感じない程平穩であつた。

錫蘭島のロンボに入港したのは二十八日の午前であつた。朝餐後同志を語らひ五人連れで上陸し、一臺の自動車で三時間許りも乗廻したが、見たものは博物館佛堂佛教の學校、椰子の林、カレーライスで有名な某ホテル、寶玉店などであつた。佛教の學校で生徒は机を持たないで

板場に蹲居しつゝ、椅子の上に書籍を置き、先生の椅子にかゝつて上半身裸體で居たのが目に着いた。歐洲を出てから段々と東に來るにつけて人相なり動作なり家屋なりがお國振りに近くなつて來るのは善いが、夫が常にあさましさ醜さを伴うて居るので却つて不快を感じることもなつた。

午後錫蘭島を後にして出た。此處と新嘉坡の間のみに見るといふデツキパスセシヤール三十人位が増加して異彩を放つて居る。其れは名の如く甲板上天幕を張り晝夜此處に住し、食料一切を携帶して乗船する馬來人又は印度人である。食品は大概手製のカレーライスで之を左手で握り口に投げ込んで食ふので其の手ぎわの巧妙さは吾人を驚かすのである。尤も其の中には富豪の令嬢らしき（其の實は早婚國とて夫人だと聞いたが）もあつて花やかな絹衣を纏ひ且又寶玉入りの金製飾り品を身に着けたのも見受けた、處が是等の輩も船中は勿論の事、下船する時など既足のまゝ臆面もなく過ぎ行くのには驚かざるを得なかつた、十月三日新嘉坡着。鈴木商店の大久保、郵船の松野、商船の香春三君の御世話を受け又晝餐を

某ホテルで其にした。三君が熱帯で活躍多年なること其の皮膚の次第に熱帶式に變るにても知られた。食卓では面白い熱帶物語やら日本人物語などを拜聴して面白かつた。午後は大久保君と二人で植物園と市内見物に暮した。此の地の植物園は特に熱帶産品の豊富なので世界に冠たるものであるが、予の目に新しかつたのは温室が無く、蘭科植物等を収めた涼屋の存することであつた。

五日の早朝社用で來られた松野君と握手したのが新嘉坡の見納めで間もなく船は東した。此處にもコロンボにも日章旗を掲げた船は十餘隻あつたのが嬉しかつた。

船は次第に北へと指して行く、渺茫たる洋上で日本船と出逢ふのは唯一の樂みであつた。八日の夜の九時頃であつたらう、北白川宮房子内親王御塔乗の郵船に出會した頃に付船員も乗客も皆甲板に居列んで迎送した。

十日黎明船は香港に着いた。川口一郎君其他鈴木商店在勤の同窓會諸君の訪問を受けて上陸した。同店の厚意で島廻りを試みたが、案内役として同店在勤の守山政吉君を擇ばれたのも予の爲にはらぬ問題があらちちらで囁かれた。夫れにしても四十日間世話して下さつた船員には、船長から水夫の末までに心からの感謝を捧げねばならないと思ふのであつた。之が土陸前の感想であつた。

十九日未明和田岬にかゝつた。日出前の檢疫は謝絶する権利があると同船同食卓の織田博士に聞いて居たので例刻まで床を離れぬこととした。離床後間もなく檢疫を受け九時第二突堤の上に立つた。旅行記は此の歸朝上陸の第一歩で熄めねばならない。

歸朝後友人から旅行中の感想を聞かれるが旅行中には見聞に逐はれて感想を起す追が少く、歸朝後事々物々に觸れて彼を想起したり比較したることが多い。けれども茲に物語るには餘りに分量が多過ぎる。只二三の所感を記せば（一）日本船の何れの海洋にも活躍して居たこと（二）日本語を使用する外人に度々驚かされたこと（三）日本人の旅行者（觀光者研究者共）が多かつたことは意外であつた。同窓會員諸君が各地共活動して居られたのは意外でなかつたが豫想以上であつた。而して是等の諸君から格外の配慮を受けたことこの多大であつた爲に予としては事

奇遇であつた。同君の先考は春農、先祖考は湘航と號し南書界に名聲ありし人である。湘航翁の書は特に本邦書界の珍品たること夙に定評が存して居る。政吉君はこんな事を一切店員中に秘して居られる模様であつた。政吉君と予とは同郷關係師弟關係もあつた。

午後にはピクトリヤビークに登陸した此の夕左記諸君から廣東料理の珍差を受けた。

（鈴木）川口、山中、水谷、濱田、横關（江商）柴原、伊澤（物産）竹村、谷田（日棉）中谷（東汽）岡の諸君

同君は時偶來會せられた人で予は日本出發當時横濱で御世話になつたのが今又茲て手を握つたのである。

十一日發香港を後にして發した。十二日臺灣海峡に入ると同時に無線電信受付の報告を受けた。十四日早朝甲板に出づれば海潮已に黄泥色を呈して居る。午後長江に入つたが日没前漸く上海埠頭に着した。郵船の安田君の訪問を受けたが、同君とは十年餘を隔て、出會したのである。

十五日は終日安田君の案内で隅から隅迄上海を見物した。此の夜同窓會の招擧を受けたが會衆左の通りであつた。

ぐる程の失策もなく僅々半歳の間に多大の收納を得て無事に此の大週遊を終へたのであつた。歸朝後友人から失策談を告げよと望まれるが失策の持合の甚だ貧弱なるに窮すると同時に予は各地に於ける援助の賜の甚だ多大なりしを永久に記念する。

商大問題本部實行委員會

十一月十七日午後六時半より具格案昨年度豫算計上決定後第一回の實行委員會は母校兼松記念館に開かれた、久しく寢食を忘れて東奔西走其の全力を注いで居た一同は、多年の希望實現の曙光を認めた祝心にか珍らしくも用意せられた、さつま汁に舌鼓を打ち、食後直ちに竹田君座長席に着き、具格案の豫算に組入れるまでの経過を報告し、尙今後同窓會の取るべき道に付き協議して午後十時解散した。

- 參會者 竹田君、刀禰館君、野田君、麻生君、永井君、藤岡君、前田君、小山君、鮎川君、武岡君、室賀君、藤原君、生島君、松坂君、齋藤君、

（郵船）安田（臺銀）柳田（自營）畑（日華）小篠（鮮銀）大草、宮崎（物産）守谷（東棉）三好、橋本（住友）新口（久原）和田（伊藤）西澤（上紡）堀場（小津）永井の諸君

十六日早朝上海發、船は土佐沖の航路を取るとの噂さであつたが、船客の希望を容れる爲とかで内海航路を取ることになつた。お蔭で内海中是まで常に夜間のみ通過した處などを晝間に見ることなどが出來た。

四十日の航海に船客間の話柄は次第に盡きた。往航の郵船では往々にして船客日本人中に團體が出來たり軋轢が生じたりするとも聞いたがリアイン(?)された人のみを載せた復航には其れも無く平々凡々であつた。船が香港に着く瞬間同地にて下船せんとした一日本人（實は臺灣人）が禁輸藥品を携帶して居るとかで英國官憲に拘引せられ、手荷物係の船員も一時其の筋の調査を受けたので、此の臺灣人の素行やら何やらが暫く話柄の缺乏を補うた。併し之も上海發後には話柄たる價值を失うた。内人も外人も殆んど同一の境遇で過ぎたのでかうなること子供船客が八釜しいとか食料が不良だとか

永津君、林君、服部君、杉田君、赤星君、丸谷君、須藤君、坂西教授、小川教授、田崎教授、瀧谷教授

決議事項

- 一、本部關係各方面へ禮狀差出ノ件
- 一、今後尙引續キ神戸商業大學實現ノタメ一層ノ盡力ヲナスベキコト

同窓會書記任免

書記永安仙藏君十一月初旬一身上ノ都合ニ依リ辭職シ其ノ後任トシテ十一月十六日高瀬信雄君ヲ新ニ書記トシテ採用ス

凌霜會神戸午餐會

に就いて

今迄毎月二回(第一水曜日第三水曜日)の午餐會!と云ふ名は近頃あまりに會員一同に有意の會の如く感じない様になつたと云ふのは其の通知の徹底しなかつた事もありすが時間のあまり長すぎたのが主たる原因と思ひますで今度すべての方針を一新して更に盛大な會に致したいと思ひます、就いては時間出來得るだけ短縮して遅くとも十二時十五分に始め一時には自由解散の出來る様に世

話人で精々盡力する事に致しました。

會場では皆様の御姓名を自書して戴き記録と共に、永く保存し會報に凌霜會だよりとして午餐會の珍談奇論を掲載する考へです。

通知の方法は四百人近くの皆様に一人一人に致したいのですが經費と時間の都合で出來兼ねますので、御存じの方を片端から御連れして下さいさるやう御願致します。

尙ほ何回デーと云ふのは其の回の卒業生の方が主となり種々と盡力もし又最も多く集ると云ふ意味なので少くとも半数以上の同期の方を御連れして戴きたいのです。

所謂定連の會にならない様に精々皆様の御盡力を御願致します。

追而明年一月の中旬頃には新年宴會を兼ね凌霜會大會を開催致したいと思ひますので時日決定次第御通知は致しますが萬障を御繰合の上是非御來會を願ひたいのであります。

凌霜會

一時日 毎月第一第三水曜日正午より一時まで

一場所 舊居留地(仲町通)東陽軒

一會費 金壹圓五拾錢

大阪凌霜午餐會移轉

一時日 毎土曜日正午

一場所 東區堺筋瓦町停留場白木屋吳服店六階食堂東南隅の卓

一會費 約五拾錢より一圓位、各自好みの食事を注文して支拂はるべきこと

凌霜會便り

近頃所謂定連の會の様になつて來た午餐會を何んとかして盛んにしたいと云ふ意味から今まで世話役を務めて居た三十四銀行の田中氏が勝田汽船の刀禰館氏に總ての依頼する事となり、先週の土曜日(十二月二日)刀禰館氏と共に田中氏を訪ふ、結局時間の長過ぎた事とプロパガンダの足りなかつた事とが主なる原因だらうと云ふので一生懸命宣傳して見たが集る者僅に十五名、定刻十二時十五分迄に來られた方は、第一着田中印刷所のマスター田中守一氏曰く、「新世話役の刀禰館さんの迎ひに來られて時間勵行正十二時に來て見ると第一番」續いて永津孝實氏

竹田龍太郎氏、篠原正次氏、佐竹員治氏、小川實三郎氏、伊藤盛輔氏、田中榮氏、服部春一氏其れに刀禰館氏と筆者の十一名、刀禰館氏サインの後に「正十二時に會場に行つて見たら時間勵行第一回の會合として多數の出席を豫期して東陽軒の主人が二十八許の座席を設けて居たので成績如何と内心懸念して居たが定刻十二時十五分迄に上記の諸君が來着せられたので大いに意を強くした」と書き残された、直ちに食事に掛る。

話題は例年遅れる名簿の話が第一番、一矢は刀禰館氏から田中守一氏に向けられた「名簿は何日頃出來上る豫定なんですか」「二十日頃でなくては」「其れは困ります……」と云ひかけると竹田氏「同窓會の印刷が随分多かつたので其の様に

は行かないだらう」となるほど昇格問題の前には名簿が少々遅れる位はとなる、話半ばに、飯島幡司氏、吉川小三郎氏、北濱留吉氏、瀬戸時友氏と續いて見える飯島氏席に着くや直ちに話は禿に變る、禿! 禿! と人は云ふ、頭の禿と顔の禿、何處までが頭で何處からが顔か、或人曰く、首から上で筋肉が神經の命する如く自由に動く範圍は是れ顔にして然ら

ざる所は即ち頭なりと、稍々専門的染みた斷定を下す、然し服部氏の静座法の説明からさうも斷定出來なくなり結局禿は顔の禿でも頭の禿でも禿てる者はやつぱり禿だ、竹田氏の禿に就ては、又種々と珍談起り、何日かの會に座長席に座した時の氏の頭の禿つ振り、其の禿に於て既に座長たる資格ありなんて誰やらが話したし、一同大笑ひ、飯島氏サインの後に「遅刻したれどもワザワザ出席す早速禿の話始る、此の旨特に堀内泰吉君に報告す」と、其の間常に昇格問題は話頭に昇る、定刻一時となれば一人減り二人減り一時十五分までには、食堂内には既に筆者只一人となる。(T生)

香港支部會報告

山口 輝一

世には當然、然かくあらねばならぬ事が何かのひやうして妙な具合に妨げられてをる事が多い、母校の昇格も其の一つであつた、此の問題が起きたのは今から五年前であるが、此の當時既に決定すべかりしものが不自然な事情で、今日まで決定を見なかつたのである。

十一月十日の夕方、母校の昇格が愈々閣議で決定したと日本電通社から入電があつた、私は一度は當然の事實に到達したまでだと獨言したけれど、振り返つて過去五年の間、お互の心をどれだけ悩ました問題だらうと反問する時、自然と何とも云へぬ嬉しさが込み上げて來るのである、誠に私は大正七年に初めて此の問題を起した、發頭人の一人なので一入感概が深い。勿論問題は議會を通過しなければ確定のものではないけれども、周囲の事情は先づ動かすべからざるものとして許してくれるであらう、私は先輩を促して其の翌日校長宛に當支部より祝電を發することにした。

そこで私は靜に自らを省る、母校は昇格せざるべからずと叫んで起つた我等は今や宿志を達したけれど、唯だ慢然と祝盃を手にすることが出來やうか、新しく美しい装を凝らした、母校を誇らんとする者は先づ自らを省みて底知れぬものさびしさを覚えるであらう、それは母校を愛すればこそ起る自責の念であらねばならぬ。

我等は昇格を叫んで起つたけれど、それは看板の取り替へてはなくて代えるこ

とによつて、更に大きな深いものを獲ることにあつた、我等は我等の心の中に書く彼岸が漸次開け行く様を見て、いかに母校の光輝ある將來を欣喜の情を以て想像せずには置かれぬ、同時に自ら省みる事を忘れることが出来ぬであらう。

さあれ、昇格の決定は事當然の歸結としても猶ほ祝意を表することは決して無意味ではないといふ趣旨で、十八日午後七時から當地清風樓で祝賀の宴を開き、左の通り寄せ書きを本部に送つて母校の萬歳を祝す、出席者は左の通り。山中氏が不在柴原中谷兩氏が微恙で缺席の外は支部員總出である。(十一月十九日記)

川口(鈴木)、水谷(鈴木)、竹村(三井)濱田(鈴木)、谷田(三井)、伊澤(江商)横關(鈴木)、山口(三井)寄せ書きの通り

母校を愛する心は卒業後益々強くなる、昇格の音報を耳にし同窓生相集り祝盃を擧げる、こんな嬉しい事はない。伊澤誠次

母校昇格決定!! 吾々の心配が長かつたけれど、校長を中心として母校の話がそれからそれへ盡きない、喜びに満ちた八人の心はみな今個しい、筒簾に歸つて居る。神戸高商萬歳!! 更に發展を祈りて止まない。濱田

遙かに祝す母校多年の宿望昇格將に成らんことを。横關

唯今夕は柴原氏の此の席に見えざるを最遺憾と致候年々俱に母校と吾等同窓同人の榮え行く前途を想見して愉快に堪えず。竹村英昌

遙に母校の昇格を祝福し併せて之の光榮をして恥しめざらむ事を。谷田俊雄

吉報を手にして欣喜に堪えず茲に祝盃を擧げて前途之萬福を祈る。水谷武夫

今日こそは何んぞ云つても御目出度い事の限りです、香港では禁酒で知られた私もようこうなつては酒をのますにはいられませんが、ソウ酒は悪いものとは思ひませんが、世間の手前を裏切つて迄祝福しなければならぬ、光榮に浴し得た事を神に感謝します、と共に先生以下皆々様の御健康と御奮闘を祈つて止まらざらうといたします。

昇格愈々決定の吉報に接し將來の多事を思ふ、校長始め同窓會學生諸君の御健在を祈る。川口一耶

何と云はうか。

雲霧れて異國の月のものさびし
こども申しませうか。山口

MIZUSHIMA TETSUYA,
Kumochi, Kobe.

Conveying hearty banzais for almanacs elevation expecting her glorious future Dohshokai-shibu.
15 words, 2/30 p.m. 11th Nov, 1922, N.K.

紐育同窓會支部便り

去る十七日付にて東京より「昇格怪し總理、文部、大藏大臣宛嘆願電頼む」との入電有之候に就いては早速同窓會員紐育在住者集合仕り、決議の上別紙寫の通り架電致置候、當日の會合御報告券々別紙同封仕り候御高覽被下度候
大正十一年十月二十二日

在紐育同窓會員一同

○昇格問題の雲行が怪しくなつたと云ふ事は東京から來た山中君宛十七日附の電信が手に入るまで夢想たもしなかつた。「昇格怪し、總理、文部、大藏各大臣宛嘆願電頼む」と云ふ電信を握つた儘、暫く茫つとした位。

○三井のオフィスからそれく、電話が掛る「場所」Railroad Club の Room No. 6 二十日の十二時半から、晝飯を食ひ乍ら」と云た様に早速鳩首合議すべき日と時間が定つた。何でも其の日は英國のロイドジョージが辭職した翌日の日で。カチ〜音を立て、廻つてゐる Railroad Club のライッカーでは後繼内閣の顔振豫想か何か、次から次へと知らされてゐた然し其の日の僕達には或意味から云

つて母校が死ぬるか活くるかの瀬戸際にある昇格問題の方がもつと重大な意義に考へられた。日本の様に人物拂底で困らない英國では放つて置いても偉い政治家が出て來て、旨く料理するだらう差當り母校の昇格は自分達が肌ぬぎでやらなければ、どうやら蟲が喰いそうた。「Sword is in my hand」とロイドジョージがマンチエスターを去る日、汽車の窓から民衆に叫んだと云ふ言葉を其の儘、借りて、教授も學生も同窓生も起たなければならぬ。

○目の廻る様に晝過の時間忙しい仕事を預かつてゐる連中が、出張中とか病氣とかで不得止もの、外、全部顔を揃へたのに徴しても其の意氣込は判る。

Club の Room No. 6 の窓からは世界の紐育の心臓が脈打つと云ふ高い建物が聳へ立つのが望まれる。Wall street の金の唸り聲も聞へそうた、此の間にあつて遙か母校の昇格問題は心を痛めてゐる日本人十六人ありとは誰れが知らう。隣りの部室からは盛な拍手が起る何處かの會社の株主連中が儲ける方法か、儲かつた金の始末をも心配してゐる事であらう。「いつそ廢校するに加かず」とは尤も悲

痛な聲。

「暫く形勢を觀望しよう」とは考へたらしい叫び。

「未だ確報が來ない以上、暗中摸索の體だ、不取敢東京からの要求通り三大臣宛に電信を打つて懇請するより外あるまい」とは遂に一致した妥協案。

○次に電信だ、電文の起草委員は誰れにしようとか何とか云つてゐる内に皆の考が凝つて出來上つて仕舞つた。

總理大臣、大藏大臣宛各通

「神戸高商ノ昇格ハ歴史アル同校ノ死活問題ト信ス、是カ實現ノタメ、此ノ際特ニ閣下ノ御援助ヲ懇請ス」

文部大臣宛

「神戸高商ノ昇格ハ歴史アル同校ノ死活問題ト信ス、是カ實現ノタメ、此ノ際特ニ閣下ノ御援助ヲ懇請ス」

同窓會本部宛

「本日三大臣宛架電シタ此ノ上トモ十二分ノ御奮闘ヲ望ム」

○學生達がどんなに悩むでゐるかを考へると涙がこぼれる、太平洋を渡つた此の

三つの電信が何等かの印象を與へて、幾

度か傳へられて幾度か失望された「神戸

高商昇格決定」が愈々實現する一助とも

なる事を祈る

○其の日集つた者順序不同

谷川(滿鐵)小林(日本棉花)白井(三菱)恒内(江商)三浦(久原)木谷(大同製)白井(住友)久保田(扶桑海上)澤井(飯田)助野、久野、溝口、土井(以上鈴木)山中、日塔、中川(以上三井物産)當日幹事、山中助野 (まつじろ報)

和歌山縣同窓會

支部便り

拜啓晩秋の候益々御清祥奉賀候。陳者去る十一月五日午後三時和歌山市一番丁米榮支店に於て當支部秋季總會開催同七時解散致候。

參集者

高井勘太郎君、鈴木元善君、山本金助君、山本幸太郎君及び小生の五名にて今回は會員中事故の爲め參會者少かりしは止むを得ざること、存候へ共當支部存在の意義に於て聊か物足らぬ感を深からしめ申候。

先は不取敢右御報告申上候。敬白。

大正十一年十一月十六日

和歌山縣支部幹事

松村 耕吉

在神十二期生の會

(學兄宮田君のために)

曩に在外研究員として平井君を送つた我がクラスは又宮田君を送ることゝなつた。財界は一向振はざるに學界は益々多事である。

君の首途を祝すために青木君の肝入りで十一月十一日の夕べ相生町の三輪で久々振りにクラス會を開いた。集る者

宮田、大崎、山中、寺田、八家、西村(二)、横田、小林、東、宇治、堀江、南、小西(孝)、佐藤(清)、青木、濱の十六名。簡臺を去つて初めて顔を合はすものもあつて仲々賑かだつた。主賓が學界の秀才だけに話は眞面目で宮田君の學界の消息をおどなく拜聴した。又時々昔を思ひ出して誰云ふとなく本一の經濟の點數の中所謂「絶對的に濟度し難さ」部類に今日の宮田君も入つて居たと云ふて皆で大笑ひをした。綿々として話は盡さず秋の夜長に時の移るのを忘れて九時過ぎ散會した。

此の日小西孝之助君は大阪から佐藤清七郎君は岡山から能々來神して宮田君のために會を盛にして呉れた。謹んで謝意を表して置く。

終りに旅路穩かに目指す彼岸に達せられんことを近く鹿島立つ學兄宮田喜代藏君のために心から祈つて止まぬ。(その昔岡山の小學校で机を並べし友交路記)

尚ほ次回は阪神聯合で忘年會でも開いてはどうかと云ふ話もある。前々回より會費の殘金拾七圓七拾五錢はそれ迄筆者の手許に預つて置く。

會員動靜

Aの部

●阿部 研吾君(一五) 轉課及轉居、勤務先、大阪市北區富島町大阪商船株式會社會計課◎住所、大阪市西區四島町北港住宅三三二〇二、

●青柳 辰雄君(一〇) 轉居、續演正金銀行辭職◎住所、東京府豊多摩郡澁橋町一八三、

●安藤 米三君(一一) 轉籍、小倉市外篠崎、東洋陶器株式會社(會社の營業種目、磁器食器類、陶器食器類及衛生陶器類、電五三二番、六四四番)◎籍及現住所、福岡縣企救郡板橋町字篠崎二九四ノ一、

Eの部

●江上 龜雄君(四) 轉居、住所、大阪市西區西長堀南通五丁目五番地(電新町三八一八番)

Hの部

●芳賀津二彦君(一三) 轉職及轉居、勤務先、大

區田町二丁目森水製菓株式會社

●星野 保君(一五) 轉居、住所、兵庫縣武庫郡住吉村字梅ノ木八六三、

Iの部

●池尾 與一君(七) 轉居、住所、神戸市千島町四丁目二ノ五、

●今津儀八郎君(二三) 轉居、住所、神戸市大道通二丁目四、

●今井 明君(一六) 入營、大正十一年十二月一日岡山歩兵第五十四聯隊第一中隊一年志願兵

●泉 威八郎君(一一) 轉居、鈴木商店辭職◎住所、神戸市五宮町八、

Jの部

●實 保二君(九) 轉勤、勤務先、Suzuki & Co., 220 Broadway, New York City, U. S. A.

Kの部

●神谷勝太郎君(八) 轉居、住所、青島市外滄口鐘淵紡績會社青島工場社宅

●河上 俊夫君(一四) 轉居、住所、福岡縣田川郡糸田村明治鑛業株式會社豐國鑛業所

●小池卯一郎君(六) 轉居、東京市牛込區赤城下町三四、

●兒玉 翠靜君(八) 轉勤、勤務先、南滿洲湯崗子鐵道附屬湯崗子溫泉株式會社(專務取締役)◎住所、南滿洲湯崗子

●兒藤 弘君(四) 轉居、住所、熊本市新町三丁目一五、(電長二三五番、二三六番)

●小室 健夫君(八) 轉勤、勤務先、神戸市三井

物産株式會社肥部神戸支部

●北村榮二郎君(一〇) 轉職、勤務先、大阪市北區中ノ島三丁目大阪朝日新聞社營業局◎住所、兵庫縣武庫郡深江神樂町◎住所、二、大阪市西區靱上通二丁目三六、高橋方

●小南 友七君(一四) 轉居、住所、大阪市東區廣小路一四、小池那太郎方

●黒岩寅喜代君(一四) 轉勤、勤務先、大阪市北區中ノ島二丁目久原商事株式會社大阪支店

●岸田 清淑君(一五) 入營中ノ處、甲種勤務演習ノ爲大阪歩兵第十八聯隊第九中隊(豫備見習主計)へ十二年三月末日まで在營

●小石俊一郎君(一六) 入營、京都市外伏見歩兵第三十八聯隊第九中隊一年志願兵

●神原 謙藏君(一六) 入營、兵庫縣篠山歩兵第七十聯隊第三中隊一年志願兵

●小柳 六郎君(一六) 入營、久留米歩兵第四十八聯隊第六中隊一年志願兵

Mの部

●前田 英治君(一四) 轉職、勤務先及住所、京城市本町二丁目二〇、前田合名會社(取扱品目、清酒麥酒、醬油、其他清飲涼料水卸小賣、電本局長一三七)

●眞島 數雄君(中退) 大正十一年十一月一日死亡

●松井宗次郎君(五) 轉居、住所、神戸市野崎通七丁目二三、

●松尾 守一君(一一) 轉勤、勤務先、Suzuki & Co., 220 Broadway, New York City, U. S. A.

●榊田和一郎君(一六) 入營、姫路歩兵第三十九聯隊第七中隊一年志願主計生

●松島 鄭司君(八) 轉居、住所、大阪府三島郡

阪市東區今橋四丁目、株式會社榮井商店大阪支店◎住所、兵庫縣武庫郡蘆屋五四九、

●原田 爲惠君(一一) 轉居、岡山縣淺口郡里庄村大字里見

●原 伯太君(七) 大森ト改姓

●早川 登君(一六) 入營、大正十一年十二月一日ヨリ東京赤坂歩兵第一聯隊一年志願兵

●春日伊久藏君(一六) 轉職、沖繩縣那覇市立那覇商業學校

●橋本 良平君(七) 辭職、株式會社東光商會を辭職◎現在、東京府下落合村下落合六〇四、

●平野誠三郎君(一四) 轉居、大阪府外玉出町東濱田九九五ノ一、和方

●平松 棟爾君(一五) 轉課轉居、大阪府北區曾根崎町上二丁目宇治川電氣株式會社營業課營業部◎住所、大阪府府能郡麻田村大字麻田一五七九(螢ヶ池停留所南三町)

●波多野彌治君(一五) 轉職轉居、勤務先、大阪府北區玉江町三菱ビルディング内日本窒素肥料株式會社◎住所、大阪府外天王寺寺明治通り二二一九ノ四、

●林 隆介君(一六) 轉職、勤務先、大阪府西區西長堀北通二丁目十八番地岡谷合資會社貿易部

●菱川 新吉君(九) 轉居、住所、三重縣河藝郡大里村

●英 清藏君(一四) 就職、大阪府東區安土町二丁目日本陶器商會

●堀戸 兵次君(一六) 轉勤、勤務先、大阪府北區宮島町大阪商船株式會社文書課

●堀田 英夫君(一五) 轉勤、勤務先、東京市日本橋區駿河町一ノ一、三井銀行營業部

●藤本 胤一君(一五) 轉勤、勤務先、東京市芝

吹田町東吹田字濱田(新道)

●松山 善高君(一六) 入營、大阪歩兵第八聯隊第七中隊第一班一年志願兵

●松岡若太郎君(一六) 轉勤、轉居、勤務先、小樽市南濱町四〇七、山下汽船鑛業株式會社小樽支店住所、小樽市末廣町七、

●三田 次郎君(一六) 入營、姫路歩兵第三十九聯隊第七中隊一年志願兵

●三好 隆郎君(九) 轉勤、勤務先、支那上海四川路四十九番三井物産會社内東洋綿花株式會社氣付、(日本郵便局私書函第二二一號)

●美田 良信君(九) 病氣の爲鈴木商店を辭し、鳥取市湯所町垣屋長次方にて靜養中

●南 金太郎君(五) 山一合資會社を辭し、現住所にて自營(外國爲替仲立業)

●森田 軍治君(一六) 轉居住所、京都府與謝郡城東村惣村二、

●森野 憲由君(一六) 轉勤、轉任勤務先、東京市丸ノ内日本郵船株式會社本社◎住所、東京府西葛町宮仲二三八三、

●森 正樹君(一六) 就職、勤務先、熊本縣八代郡鏡町日本窒素肥料株式會社鏡工場

●村上 輝正君(一六) 入營、姫路歩兵第十聯隊第十二中隊一年志願兵

●牧野 脩三君(一一) 自營、神戸市裏町四十番(元居留地)ラッキヤ商舖

●水澤 驥君(一一) 自營、神戸市裏町四十番(元居留地)ラッキヤ商舖

Nの部

●長澤周一郎君(一四) 轉勤、勤務先、東京市日本橋區堀江町二丁目八番地東洋綿花株式會社東京支店

●中井 一郎君(一五) 轉居・住所、神戸市東町
通二丁目四十四番地日本商事株式會社

●中村 文夫君(一〇) 轉勤・勤務先、大阪市北
區北濱五丁目二十二番地住友會社

●中村 俊夫君(一二) 辭職・鈴木商店辭職◎現
住、神戸市神樂町六丁目六三

●中村 鼎君(九) 轉居・住所、兵庫縣武庫郡
本庄村深江神樂田(蘆屋停留所西海岸)

●中村 主信君(一六) 就職轉居・勤務先、東京
市國民新聞社經濟部◎住所、東京市本郷區道分町二〇
西濃館

●中西 定藏君(二五) 入營中の處甲種勤務演
習の爲、姫路歩兵第三十九聯隊第十中隊(豫備役見習
士官)(尙ほ十二月三十一日迄在營)

●西本 蒼君(一一) 轉居・神戸市京町十一番
住友會社倉庫神戸支店

●西村邦之助君(一六) 勤務先・神戸市仲町四四
岩井商店神戸支店◎住所、兵庫縣武庫郡六甲村徳井里
恒心寮

●西尾 定藏君(一三) 轉居・住所、東京市本郷
區道分町二〇、西濃館(電話小石川八四〇番)

●西脇 徹君(一五) 轉居・住所、兵庫縣武庫
郡大庄村西新田、小西福藏方

●野崎 正美君(一一) 轉居・兵庫縣武庫郡西宮
町字倉開地二二五〇、

●永井 清一君(一六) 入營・小倉歩兵第十四聯
隊第十一中隊一年志願兵

●小栗吉之助君(一五) 入營中の處甲種勤務演
習の爲、福知山工兵第十大隊第一中隊(見習士官)(十
二年三月末日まで在營)

○の部

●小田 萬壽君(二〇) 轉居・住所、墨濱市本町
四丁目六五、松文商店貿易部

●小川 保君(一六) 辭職・大阪丸江商店辭職
◎現住、富山市仁右衛門町

●大野 愛樹君(一六) 入營中・伊藤忠商事大阪
絲店支店休職◎住所、愛媛縣松山市御室町五三、

●岡 久吉君(九) 轉居・住所、神戸市東川崎
町二丁目官舎

●奥田 惠郎君(四) 轉居・東京府下中野町高圓
寺五五〇、

●佐々木 朔君(一六) 轉勤・勤務先、神戸市海
岸通大阪商船會社神戸支店

●櫻井 縣君(五) 轉居・兵庫縣武庫郡魚崎町
横屋池ノ西角

●妹尾光太郎君(三) 轉居・兵庫縣武庫郡精道村
蘆屋船戸二八一、(電二二五)

●城崎 祥藏君(一) 轉居・勤務先、東京市京橋
區銀座三丁目松昌洋行(電京橋一七二、三五〇六、三
五〇七)◎住所、東京市本郷區駒込末片町一三九、(電
小石川二七四四番)

●園田恒三郎君(六) 轉居・勤務先、神戸市海岸
通五番地商船ビルディング七〇六號室(電三宮長五七
〇番)◎住所、神戸市東内橋通三丁目一八、(電三宮長
一八三八、六〇二二番)

●島原 龜雄君(二四) 轉居・住所、東京市外下
落合字中原五八八、梅津方

●鈴木 正綱君(一五) 轉居・住所、神戸市東須
磨字井上四、

●鈴木 榮一君(一五) 入營中の處甲種勤務演
習の爲、京都歩兵第三十八聯隊第六中隊(見習士官)(

Sの部

十二年三月末日迄在營

●坂上 和夫君(一五) 入營中の處、甲種勤務演
習の爲、歩兵第八聯隊第二中隊(見習士官)(十二年三
月末日まで在營)

●杉本 恭一君(一六) 入營・歩兵第六十二聯隊
第二中隊一年志願兵

●田畑 隆雄君(一六) 勤務先・大阪府東成郡平
野町大日本紡績平野工場倉庫課◎住所、兵庫縣神戸市
兵庫西出町一五八、

●田中 次郎君(七) 轉勤・勤務先、神戸市海岸
通一〇、鈴木商店砂糖部

●田中伊三次君(一〇) 轉職・轉居・勤務先、大阪
市西區江戶堀北通一丁目日本電線製造株式會社大阪販
賣店◎住所、兵庫縣武庫郡西灘村味泥二二三、

●多喜直次郎君(八) 轉職・轉居・勤務先、和歌山
縣立和歌山商業學校◎現住、和歌山市出口中ノ町◎住
ノ二、兵庫縣武庫郡西宮町市庭町

●豊田 綱郎君(五) 病氣の爲、大阪武田商店を
辭し郷里伊勢龜山町西町の自邸にて靜養中

●辻 勝君(二) 轉勤・勤務先、大阪府西區
鞆南通三丁目小津武林製業株式會社◎住所、京都府伏
見町新町七丁目四六二、

●塚田銀治郎君(一一) 轉居・住所、東京府荏原
郡平塚村戸越五七七五、

●徳田 馨君(一一) 就職・轉居、下ノ關市入
江町角輪組内職會

Uの部

●上田耕一郎君(七) 轉勤・勤務先、兵庫縣加古
郡加古川町日本毛織株式會社加古川工場◎住所、兵庫

縣加古木 丘村平野

●渡邊 悟市君(中退) 就職・勤務先、東京市京
橋區南傳馬町三ノ三四、北日本製業株式會社

●山田正太郎君(八) 轉居・住所、京都市西外院
村大字山ノ内字中知十番地

●小田 速雄君(一五) 轉隊・歩兵第三十八聯隊
第三中隊

●山本 茂安君(三) 轉職・勤務先、神戸市相生
町二丁目六〇ノ一、株式會社神戸電機製作所(電元町
三七五、一三七五番)◎住所、武庫郡住吉村字唐松八一
七番地

●山口 五一君(八) 辭職・大阪府丸松合資會社
勤務の處今度同社辭職

●山田直五郎君(一五) 入營中の處甲種勤務演
習の爲、仙臺歩兵第二十九聯隊第二中隊(見習士官)十
二年三月末日まで在營

●山本卯三郎君(八) 轉職・勤務先、神戸市筒井
町六〇、神戸合資工業株式會社營業部(電三宮五三四
〇番)◎住所、神戸市平野下祇園町三六八、安藤方

●吉住 岩藏君(一六) 入營・大正十一年十二月
一日京都府下深草輕重兵第十六大隊第二中隊

Wの部

Yの部

●三宅 舜治 前田房之助 淡川 共吉
山田初太郎 中村喜一郎 荒木 忠雄
平野 扶 千村 敏彦 藤田 勝一
原田善之助 園田 正治 白澤和嘉夫
後藤 間一 木平 信美 石津 和光
泉 重雄 川端藤三郎 梶 徳一
阿部 研吉 藤井 壽 星野 保
水田 重吉 小笠原房穂 渡邊 嘉三郎
山口 貞一 江本 朋一 深見嘉三郎
服部 泰三 橋本 進 服部 鉄一
蒲地 満 中村 隆雄 中巻 弘
面 長太郎 和田 信純 安田 幸吉
實 光叔 土屋 美雄 谷 俊二
高水 鐵二 淵田 太郎 中川 雄治
正村 義一 吉川 仙吉 蔭山 寅一
中村 三雄 上野喜久二 甲田 宗一
高田 透 山本 金助 大久保銀太郎
水澤 驥 山本 爲惠 市村市次良
新延喜久治 原田 爲恵 藤原虎之助
石井 徳郎 岡村仁三郎 長澤周一郎
井本 悦郎 吉本麟太郎 佐渡 宏
白山源三郎 山本 麟雄 河井 幹雄
藤井 喜助 石井 源一 森野 益一
加藤由次郎 兒島徳二 三輪松二
森川 芳天 中村重次郎 長山 泰憲
大岩 鶯 大浦 龍雄 岡本 祐久
岡田 芳次 杉本 榮 田鏡 秀夫
谷 順吉 財前 正人 山川 安
屋本 義次 小林徳三郎 田中 喜八
吉田 正助 徳田 馨 塚本 重三
的野權太郎 平松 模爾 廣部 嘉七
渡邊 悟郎 長谷川輝世 小松 久
水藤 壽一 菊池 榮治

會費受領報告

(自大正十一年十一月八日
至同 年十二月六日)

一金五圓宛 十一年度分

三宅 舜治	前田房之助	淡川 共吉
山田初太郎	中村喜一郎	荒木 忠雄
平野 扶	千村 敏彦	藤田 勝一
原田善之助	園田 正治	白澤和嘉夫
後藤 間一	木平 信美	石津 和光
泉 重雄	川端藤三郎	梶 徳一
阿部 研吉	藤井 壽	星野 保
水田 重吉	小笠原房穂	渡邊 嘉三郎
山口 貞一	江本 朋一	深見嘉三郎
服部 泰三	橋本 進	服部 鉄一
蒲地 満	中村 隆雄	中巻 弘
面 長太郎	和田 信純	安田 幸吉
實 光叔	土屋 美雄	谷 俊二
高水 鐵二	淵田 太郎	中川 雄治
正村 義一	吉川 仙吉	蔭山 寅一
中村 三雄	上野喜久二	甲田 宗一
高田 透	山本 金助	大久保銀太郎
水澤 驥	山本 爲惠	市村市次良
新延喜久治	原田 爲恵	藤原虎之助
石井 徳郎	岡村仁三郎	長澤周一郎
井本 悦郎	吉本麟太郎	佐渡 宏
白山源三郎	山本 麟雄	河井 幹雄
藤井 喜助	石井 源一	森野 益一
加藤由次郎	兒島徳二	三輪松二
森川 芳天	中村重次郎	長山 泰憲
大岩 鶯	大浦 龍雄	岡本 祐久
岡田 芳次	杉本 榮	田鏡 秀夫
谷 順吉	財前 正人	山川 安
屋本 義次	小林徳三郎	田中 喜八
吉田 正助	徳田 馨	塚本 重三
的野權太郎	平松 模爾	廣部 嘉七
渡邊 悟郎	長谷川輝世	小松 久
水藤 壽一	菊池 榮治	

商大問題醜金受領報告

(自大正十一年十一月九日
至同 年十二月六日)

一金八拾圓	一口第一、八回分	上西 操
一金拾圓	一口第六、八回分	東島 健兒
一金貳拾圓	一口第七、八回分	中島松太郎
同	一口第二、三回分	澤須 徳藏
同	一口第七回分	吉田 正助
同	一口第四回分	岸 景太郎
同	一口第二回分	天野 俊一
同	一口第一回分	川口 絢二

立正大師謚號宣下記念

小なる自己に希望なく 譏り貪り悲み
 て 暗々として底知れず
 大なる我に希望あり 炎々として限り
 無く 地獄の底もまた光る
 罪になやめる諸人よ 大我にすべてを
 まかせよや さらば此の世は樂土たら
 ん
 此の理を身に讀みて 衆生をすくひ佛
 國に 男々しく進む勇士あり
 聖日違は未つ世の 佛の現れ神の子な
 り 救ひの主の再來なり。(奥貫二)

或る日の日記より

碧 生

漁村！
 それは小丘のすぐ下にある小さな村
 たつた一本の赤い煙突
 青い海と赤い煙突
 夢に見た油繪の様な
 白い船が行く
 嬉をのせて
 土地をはなれる人は幸福だらう

なぞ永遠の榮ある

夢 前 生

若き身如何に奢ることも、
 一夜の風に散る花の
 明日の光りを頼むごと
 赤き血潮を歌ふまに
 秋の白雲移りては
 小鳥に歌ひ花慕ふ
 若き心も飛ぶ星の
 輝くひまの命ぞや。
 聖にひたる純なくば
 永遠の榮なぞあらん。
 功名如何に高くとも
 流れに浮ぶうたかたの
 絶えせぬ譽願ふごと
 白帆に含む潮風に
 風神一度乗じては
 黄金に浸り美酒に酔ふ
 甘美の夢も夏の夜の
 明くるがまでの習ぞや
 聖にひたる純なくば
 永遠の榮なぞあらん。

星

遠き御空に輝めきて
 世に羨まる名無し星

なに感じてや曙のに
 己が住家を抜け出で、
 装を變へて落ち行きぬ
 月は隈なくさし照し
 さへぎる雲も無かりしが
 物哀れしむ秋なれば
 涙こみ上げ胸さけて
 何處の空に落ちしやは
 云ふべき由も難きかな。

前號會告の如く商大問題醜金
 未拂込額は此際至急御拂込被
 下度願上候

次號 原稿締切 十二月十五日
 發行 發行 一月一日

大正十一年十二月十五日印刷
 大正十一年十二月十六日發行(非賣品)

編輯兼發行人 窪 田 安 次 郎
 兵庫縣武庫郡西灘村森三十番地
 印刷 人 辻 左 武 郎
 發行所 神戸高等商業學校學友會